平成１１年度

信州新町中学校・長野県犀峡高等学校

中高一貫教育実践研究

報告書

平成１１年度（1999年度）信州新町中学校・犀峡高等学校

中高一貫教育実践研究報告

項　目	ページ
1　研究主題	P．1～
2　実践研究協力校	
3　組　織	
4　地域の特色	
5　学校の特色及び生徒の実態	
6　研究課題（概要）	
7　研究計画	
8　研究及び活動経過	
9　実践研究の内容と成果・課題	P．5～
①交流授業について	
②生徒・教職員の交流について	
③講演会・視察について	
④その他	
１０　まとめと考察	P．10～
１１　研究委員会反省	P．14

〔資料〕

資料１　信州新町中・犀峡高校交流授業報告書	P.15~
資料２　クラブ活動の交流（体験入部）	P.19~
資料３　生徒会交流（「愛郷祭」への参加）	P.21~
資料４　信州新町中・犀峡高校合同会議	P.23
資料５　中高一貫教育に関するアンケート調査のまとめ	P.24~
資料６　教科別分科会のまとめと反省	P.26~
資料７　講演会について　（三重県立飯南高等学校・飯南中学校）	P.29~
資料８　先進校の視察報告（福井県武生市立池田中学校）	P.31
資料９　〃　（高知県立四万十高等学校）	P.32~
資料10　信州新町における中高一貫教育の形態別のシミュレーションと特徴について	P.39
資料11　近隣市町村の児童・生徒の推移	P.41
資料12　信州新町地区における緩やかな連携型の中高一貫教育「中高連携教育」の試案とシミュレーション〔犀川流域地区教育構想〕	P.42~
資料13　広報信州新町	P.44
資料14　中高一貫教育についての新聞記事より	P.45~

1　研究課題　　地域の特色を生かした中高一貫教育の在り方

2　実践研究　　○信州新町中学校〔長野県上水内郡信州新町新町1006 ☎262-2028〕
協 力 校　　学校長　小林　秀雄
○長野県犀峡高等学校〔長野県上水内郡信州新町下市場70 ☎262-2044〕
学校長　宮本　康夫

3　組　　織　　○研究委員長　　富岡　　修（犀峡高校－生活指導・美術）
○副研究委員長　成田　顕宏（信州新町中－中高一貫・英語）
○研究委員（中学校）
久保田賢一（教頭）
田中　利和（教務・技術）
土屋　　武（部活動・体育）
松本　　浩（生徒会・社会）
大畑みどり（進路指導・家庭）
○研究委員（高等学校）
征矢　　憲（教頭）
米倉　　誠（教務・体育）
北澤　啓二（ＰＴＡ、教育課程・ 理科）
田中　泰徳（進路指導、学習指導・国語）

4　地域の特色

北アルプスに源を発し、長野市に注いで千曲川と合流する犀川の中流域に広がる谷合にある信州新町は、県都長野市と松本市の中間に位置し、山間部の自然に恵まれた人口約７千人の町。古くから山紫水明の地と知られ、多くの芸術家が当地を訪れては土地の人々の温かな人情に触れ、安らぎの一時を過ごした。彼らが愛した自然や素朴な山村風景は今も豊かに残っており、「美術館のある町」の美しいシンボルとして「信州新町美術館」（有島生馬記念館・信州新町化石博物館・蔵美術館併設）がある。また、町内の牧場で飼育されたサフォーク種の羊を使った料理や伝統のジンギスカン、左右高原の手打ちそばも名物であり、「アート＆グルメの町」として全国に広く知られている。

町民の高齢化と地域の過疎が進み若者の都会志向が強まる中で、少しでも多くの子どもたちが地元の高校に進学し、地元の活性化に資するようにという期待と思いが根強く、町の議会や教育関係機関でも児童・生徒の育成に努力している。町主催の中・高生の海外語学研修や美術館での中高生の作品展の開催などその一環であり、また、周辺市町村で組織する「犀峡高校を発展させる会」から物心両面で支援を受けている。犀峡高校におけるカヌー部の発足やその後の国体での活躍、体育でカヌーを取り入れた授業の開始に伴い、町当局も理解を示し、カヌー購入の資金援助や犀川の整備、独自にカヌーの講習会や全国大会を開催するなど、アウトドアスポーツにも力を注いでいる。

5　学校の特色及び生徒の実態

(1)信州新町中学校

昭和34年５月に町内５中学校を統合して設立され、本年度で創立40周年を迎える。創立当初は生徒数1000人を超え、学年７～８クラスの規模であったがその後は減少を続け、平成に入ってからは生徒数２００人台で推移している。（平成11年度１学年73名、２学年67名、３学年72名）また、町内に集落が点在しているのでおよそ３割の生徒はバス通学をしている。教育活動の中では、緑の少年団活動や町の植樹祭への参加など地域の自然とかかわる活動、久米路荘（特養老人ホーム）訪問や一人暮し老人へのはがき送付などの福祉活動、町募集によるアメリカ・ホームスティ体験への参加など、地域と結びついた活動を多く取り入れ、子どもたちも積極的に取り組んでいる。ほとんどの者が小学校からともに生活しており、互いに甘えてしまう面や変化に乏しい面はあるが、互いに協力して活動したり意見を述べ合ったりすることができている。

(2)長野県犀峡高等学校

大正10年に教員養成所として開所されてから、まもなく創立80年を迎える。山紫水明の美しい自然環境に恵まれ整備された校舎に移転して11年を迎え、視聴覚教室、情報処理室等、本校の教育課程を実践できる施設を完備している。この環境の中で、生徒のニーズに合わせて進学・総合の２コースが設置され、大学進学への対応は勿論、様々な科目やＡＥＴによる英語授業など時代に即応できる内容を多く取り入れた学習活動を展開している。生徒は純朴でおとなしく、それぞれの進路に合わせ自らの学習目標を立て、伸び伸びと希望を抱いて学習にクラブ活動に励んでいる。卒業後の進路は、大学、短大、専門学校への進学と就職が半数ずつである。

平成７年度から信州新町中学校との間で、双方の教員が互いに出向いて授業を行う「交流授業」が続いており、中高連絡会や周辺中学の生徒を対象にした体験学習も毎年実施し、犀峡高校に対する理解と交流を深めている。また、授業（平成９年度から総合コースで「地域」を開設）やＬＨＲに地元の社会人講師を活用したり、学校開放講座を開講し、地域との連携も図っている。

１学年３学級の小規模校で、近年、入学生の定員割れが続いており、また、過疎化により地元の学童児が減少、地元中学からの入学の割合も５０％前後となっている。近隣市町村や都市部からのバスや自家用車での送り迎えの遠距離通学生もいる。

6　研究課題（概要）

①６年間を見通した、地域の特色を生かした中学校と高等学校の連携と教育活動の在り方について
②特色ある教科・科目の開設と指導形態の工夫について
③生徒及び教職員の連携と交流について
④中高一貫教育の導入と実施形態について
⑤入学者決定の在り方について（その方法と内容、問題点）
⑥中高一貫教育の導入に際して留意すべき点について

7　研究計画

①中高合同による研究委員会を隔月で開催する。また、必要に応じて関係の分科会（係、教科会）を開催する。
②研究委員会の討議をもとに、それぞれの学校でも検討し、共通理解を図る。
③正副研究委員長による事前協議や意見調整を随時行い、円滑な会の運営を図る。
④中高全員による研究会議の開催又は教科別の合同会議（意見交換）の実施
⑤他県の実施校より、講師を招いての学習会の開催と視察研修の実施。
⑥信州新町内の関係機関（発展させる会・教育委員会・議会文教委員会等）でも研究会、勉強会を持っていただくよう要請する。
⑦小、中、高の関係者で学習会・研究会を開催し、情報提供や意見を聞く。
⑧体験学習の在り方

8　研究及び活動経過

月　日	会　議・活　動	内　容
2．10	第３回中高一貫教育研究会議	**長野県中高一貫教育実践研究協力校に指定される。**
3．1	長野県中高一貫教育	中高双方の校長、担当予定者が出席し、
	実践研究協力校説明会	県教委より中高一貫教育及び実践研究について説明を受ける。
4．15	**第１回研究委員会**（犀峡高校）	委員の紹介と委員会の持ち方等検討する。
5．6	**第２回研究委員会**（犀峡高校）	高校教育課石田指導主事と質疑、意見交換を行う。
		研究主題、研究計画、研究スケジュールについて検討する。
5．18	信州新町議会総務・文教委員会	犀峡高校宮本校長より「中高一貫教育について」発表を行う。
〃	**第３回研究委員会**（信州新町中）	研究主題、研究計画、研究スケジュールを決定する。
		中高連絡会、クラブ活動における連携、中高合同会議について検討。
5．21	第４回中高一貫教育研究会議	中高の校長が初めて研究会議に参加する。
6．7	犀峡高校発展させる会	犀峡高校宮本校長より「中高一貫教育について」発表を行う。
6．8	打ち合わせ会	クラブ体験入学について打ち合わせ（成田・大畑・富岡）
6．15	犀峡高校中高連絡会	中学久保田教頭他授業参観、合同会議の打ち合わせ
6．29	**中高合同会議**（役場会議室）	委員会を代表して小林校長より挨拶
		委員の紹介と教科別分科会（授業内容等交流）
7．3	**クラブ体験入部**	卓球・バレーボール・バスケットボール・弓道に体験入部し、練習に
		実際に参加したり、見学をする。
7．5	打ち合わせ会（犀峡高校）	中高の教頭と正副委員長で予算の使途について打ち合わせを行う。
7．6	第５回中高一貫教育研究会議	中高の校長が参加する。
7．13	打ち合わせ会（犀峡高校）	講演会、視察について
7．22	**第４回研究委員会**（犀峡高校）	合同会議、クラブ体験入部の反省
		１学期の活動のまとめと反省、今後の課題等を整理する。
		先進地域よりの講演会実施の検討（飯南地域が候補としてあがる）
7．26	打ち合わせ会（信州新町中）	「講演会」の打ち合わせ。

8．18	**先進校の視察〔高校側〕**	「高知県立四万十高等学校」(高知県大正町)を視察
8．22	打ち合わせ会（犀峡高校）	「講演会」の最終打ち合わせを行う。
8．23	中高一貫教育についての懇談会 （役場会議室）	宮本校長、久保田教頭、富岡、成田出席。町の教育長他教育委員、町会議員、小中高ＰＴＡ役員、高校同窓会　計３１名参加。
8．27	**講演会**　（役場会議室）	三重県飯南地域より
		演題：「連携型中高一貫教育校について（三重県飯南地域の例)」
		講師：竹林敏夫先生(飯南中学校長)、荒井順治先生・宇田克己先生(飯南高校教頭)
		を招いて講演会実施。
9．2	**第５回研究委員会**（信州新町中）	「講演会」のまとめと反省、四万十高校視察報告、
		信州新町中『愛郷祭』の展示参加、中高交流授業についてを検討
9．13	第６回中高一貫教育研究会議	中高の校長が参加。
9．17	体験学習 打ち合わせ　（犀峡高校）	犀峡高校にて体験学習（信州新町中３年生65名他周辺中学より136名参加）、信州新町中の『愛郷祭』への展示参加について打ち合わせ
9．26	**『愛郷祭』展示参加**	犀峡高校の紹介（「地域」の授業作品展示、ビデオ上映、カヌー展示）
9．27	**先進校の視察〔中学側〕**	「福井県池田町立池田中学校」を視察
10．1	打ち合わせ　（犀峡高校）	中高教頭、正副委員長、該当教科、係で中高交流授業とスポーツ交流会について打ち合わせ
10．8	**第６回研究委員会**（犀峡高校）	福井県池田中の視察報告、今後の課題、まとめの内容と様式について「愛郷祭」、体験入学についての反省等
10．22	**交流授業〔家庭科〕**（犀峡高校）	犀峡高校にて３年総合コースの「食物」(中学大畑先生担当)でソバ打ちの授業
10．28	**交流授業〔家庭科〕**（信州新町中）	信州新町中にて２年生対象の家庭科(高校池森先生担当)の交流授業
11．2	研究発表会参加	新潟大学附属中学で行われた研究会に１名参加。
11．4	軽井沢地区の講演会	鈴木孝夫先生(慶大名誉教授)「英語教育の充実と中高教育の課題」中高参加
11．8	**第７回研究委員会**（犀峡高校）	まとめに向けて内容の検討
8.9	研究発表会参加　〔中学側〕	大阪府松原市立松原第３中学校(文部省進路指導総合改善事業研究指定校) 研究会に参加
11．10	**交流授業〔国語〕**（信州新町中）	信州新町中にて３年生対象の国語(高校田中先生担当)の交流授業
11．11	**交流授業〔国語〕**（犀峡高校）	犀峡高校にて３年総合コースの「国語表現」(中学中山先生担当)
11．16	第７回中高一貫教育研究会議	中高の校長が参加。
11．24	スポーツ交流会・交流授業反省会	犀峡高校にて中高の教職員によるスポーツ交流会・反省会の実施。
12．17	信州新町教育委員会との懇談	町の教育委員・教育長と中高一貫教育について懇談
12．20	打ち合わせ会　（犀峡高校）	報告書の原案について検討する。
1．7	**交流授業〔美術〕**（犀峡高校）	犀峡高校にてサンドブラストを使ったガラス工芸の指導を行う。
1．13	**第８回研究委員会**	報告書について
1．18	第８回中高一貫教育研究会議	中高の校長が参加。
2．22	第９回中高一貫教育研究会議	中高の校長が参加。
3．2	**第９回研究委員会**	反省と来年度に向けて
3．27	第10回中高一貫教育研究会議	

9　実践研究の内容と成果・課題

①交流授業について

◇平成７年度から継続されている「交流授業」（毎年２教科で２時間ずつ）を実施し、授業公開を行う。

本年度は家庭科と国語で、①地域の材料を教材として取り入れる
②連携型を想定してＴ－Ｔを取り入れる　}をねらいに実施した。
☆家庭科のテーマ：郷土食にトライ
☆国語のテーマ　：中高Ｔ・Ｔ（チーム・ティーチング）の実践

◇地域の特性や特色を生かした授業と教材研究を行う。

成果１．中高の相互で授業を交流することで互いの学習スタイルを知り、また、ＴＴ形式での授業展開で、小規模校の良さを生かした小人数教育による「きめ細かな指導」が行われた。また、生徒にとっては互いに教員が交流することで中高の教員が身近に感じられた。

２．生徒数の減少により中高共に小規模化が進む中で、教員の相互交流による人材の補完と施設・設備の相互活用が可能である。

３．そば打ちや郷土食を作ることで、地域の素材を教材として取り入れることができた。

４．交流授業等で中高が連携することにより、中学生が犀峡高校の教育を理解し、より魅力を感じるようになれば大きな意味がある。

課題１．交流授業の通年での実施（教科によってはＴ－Ｔで、特に学力幅が大きいと思われる国語・数学・英語やカヌー等で危険の伴う体育）や複数教科への拡大と充実。

２．交流授業（連携授業）担当教員の加配が必要となり、芸術等の専門科目で専任教諭がいない場合の出張授業（派遣授業）など可能となる。
それにより小規模中学における免許外で教科を担当することが解消される。

３．地域の特色や特性を生かすために中高の６年間を通して郷土や地域をテーマにした「郷土学習（仮称）」等を設定する。そのために中高共同で地域や郷土に関連した教材や素材の掘り起こしと資料の作成をする。

４．地域の教育力(社会人講師)や施設・設備の活用の検討
※講師の謝礼（昼食、交通費）や学校以外の施設・設備利用の費用の検討が必要。

〔資料１〕

②生徒・教職員の交流について

◇体験入学の実施と生徒会活動（中学の文化祭で高校生活の紹介や授業（「地域」）の作品やカヌーの展示）、クラブ活動の連携（合同練習、見学）

〔資料２・３〕

成果１．中学生が体験入学での授業体験や学校見学により高校の実状を理解したり、授業やクラブ活動の様子に触れ高校生活のイメージがより鮮明になった。また、中学の文化祭（「愛郷祭」）への展示参加で、中学生が卒業生の作品や高校での生活に触れ、より犀峡高校が身近になった。

課題１．中高の生徒共同の活動や特別活動における生徒間の交流と連携の在り方の検討
年間行事予定に組み入れる。他の公共施設（老人ホーム等）との連携
ex. 生徒会執行部の合同（宿泊）研修やリーダー研修会、クラブの合同練習や合宿、チャレンジカヌー合宿、ボランティア活動、中高合同学力向上サマーキャンプ、合同清掃美化作業、合同体育祭（文化祭）、合同芸術鑑賞、クラブ指導者の交流

◇中高の合同教科会を実施し、それぞれの授業内容や生徒の実態を交流した。〔資料４〕

成果１．これまで疎遠であった中高の同一教科の教員同士が交流し、お互いの授業の様子や生徒の実態を報告することでこれまで知らなかった互いの学校の様子を知ることができた。また、教科指導上の悩みや現在抱えている問題等も出し合い、可能な範囲での協力体制ができた。

〔資料５・６〕

２．中学の３年選択美術の授業では、高校にあるサンドブラスト機を使ったガラス工芸の作品に取り組み、中高の教員が連携を取りながら指導に当たった。

課題１．中高共に小規模校で校務が忙しく、共通の日程で会議を持つのは大変困難な状況にある。常日頃から双方の壁を低くし、お互いに気軽に行き来できるような意識や雰囲気作りが必要である。
そのためには、新学期が始まる前に担当者会や教科会（係会）を持ち、年間を見通した上で、学校や教科に応じた連携と教育活動を計画する必要がある。

２．中高の双方が授業で何を教えているのかを知り、相互に理解したうえで生徒の実態に合わせた授業の展開や工夫が必要である。特に高校入学後に不得意科目が生まれたり、学習につまずいている生徒の実態を分析し、そのつまづきを解消するための教材作りや学習指導の研究をする必要がある。

３．交流授業以外での中高双方の公開授業や授業見学により、授業形態や進行速度の違い等を確認したり、互いの教育内容（教育課程、コース制、クラブ活動等）や生徒指導についての提言も必要。

４．中高の日課や授業形態、時間割が異なっていたり、年間計画の調整も難しい。行事等の連携を図る場合、年間計画の編成に当たっては前年度の早い段階から中高双方で調整を図る必要がある。

５．県レベルでの中高の教科別の連携学習（中高をつなぐ教材研究）の研究

◇入学前の高校から中学への学校訪問と入学後における「中高連絡会」の実施

成果１．入学する生徒に関わる生徒指導、進路指導上の情報交換を毎年実施し、入学後における指導やクラス編成に役立てている。また、年２回、中学の３学年及び進路担当の先生に高校の授業や生徒の実態を知ってもらい、進路指導に生かしてもらう。

◇スポーツ交流会・懇親会の実施

成果１．以前から実施されている交流会であるが、より中高の教職員の親睦と交流が図られた。

課題１．交流会・懇親会の地元の小学校や周辺中学への拡大。しかし、日程的な問題があり難しい。

③講演会・視察について

◇中高一貫教育を実践（研究）している先進県より、先進校を招いての中高合同の講演会を実施した。

◇中高一貫教育、連携教育を実践している学校の視察を中高の双方で実施した。

〔資料７・８・９〕

成果１．講演会や視察を通し、中高一貫教育、特に連携型の特色や内容を知ることができた。また、他県の中山間地域における教育の実情を知り、長野県における中高一貫教育や中高の連携に参考になった。

２．講演会や視察をもとに信州新町における中高一貫貴養育の形態別のシミュレーションと特徴について作成し検討をした。

〔資料10〕

課題１．中高双方に「中高一貫教育コース」（２５人定員）を設置して５年コース(中学２年より)または６年コースでの実施は可能か。
（問題点として、①進学コース化　②校内の２極化　③進路選択の早期化
④教員定数増の必要　⑤１中学の１クラス→１高校の１クラスへ等）

２．三重県の飯南地区や視察校のような周辺の複数の中学（小規模校）との連携型の中高一貫教育の検討と研究。

④その他

◇高校で実施している「地域」の授業公開を実施。（12/3公開授業）

成果１．中学の新教育課程における「総合的な学習の時間」とのつながりが考えられる。
また、カヌーや作業学習などのＴ・Ｔによる中高の合同授業も考えられる。

課題１．中高の教育課程をどのような内容（教科、科目）や方法で接続させるか。

２．中高の６年間を継続して学習できる内容や教材は難しく、継続可能で特色ある教科・科目の研究が必要となる。また、学力向上や基礎学力定着のための工夫も必要となる。いずれもＴ・Ｔでの授業が望まれるが、中高共に小規模校のための担当者の時間調整や勤務体制が問題となるろう。この場合、中高連携教育のみに携わる専任教員の配置が必要となるだろう。

３．地域の教育力（社会人講師制度）を活用した授業や校内の施設を使った地域住民に対する「公開講座」の開設の検討。（→生涯学習センターへ）

◇高校入試の影響を受けずゆとりある安定的な学校生活が送れるような入学者選抜における「簡便な方法」について検討する。

成果１．高校入試に大きく影響を受けている中学（生）の実態や問題点が明らかになった。

課題１．単年度における実践研究であり、既存の高校入試の在り方と一般入試や推薦入試と密接に関連する大きな問題であって、一定の方向や方策を打ち出すことは大変に難しい。
当面は、現行の推薦入試制度の運用で対応することが考えられる。

２．高校への進学率が高まり、受験生が全員合格したり定員が満たない中での２次募集が行われる状況の中では、中学校側や生徒・保護者の理解が難しい。

３．犀峡高校の場合、中高一貫教育は中学生にとって高校に進学できるという安易な考えが予想されたり、入学選抜がないということで中学時代の学習の取り組みや学力の低下を招く恐れがある。よって、中学でのより一層の基礎学力の定着や学力向上も視野に入れる必要がある。

◇町議会の総務文教委員会や市町村で組織する「犀峡高校発展させる会」や信州新町議会の総務・文教委員会、町教育委員会で中高一貫教育に関する趣旨説明と懇談を実施した。

成果１．中高一貫教育や研究の内容について理解を深めることができた。

課題１．過疎化が進み若者の都市部志向が増える中にあって、高校までは地元の子どもは地元で育てるという意識が弱く、中高一貫教育に対する地域住民や保護者の理解がなかなか得にくい。

２．地域住民やＰＴＡ（児童・生徒）、教育関係者、行政機関との連携や理解と協力が大切であり、関係者を集めた学習会や研究会を開いたり、「地域の教育を考える会」「地域教育推進委員会」などを組織して共通理解を図り、導入の賛否を含めた議論が必要であろう。

３．導入に当たっては学校関係者だけでなく、特別委員会（上記）を設置したうえで相当の時間をかけ綿密な計画や内容を検討し、中高双方の教職員や地域住民が納得したものにしなければ難しい問題である。

◇地域の特色や特性に合致した中高一貫教育導入の可能性と実施形態について検討。

◇信州新町地区における「併設型の中学校・高等学校」や「中等教育学校」の可能性と問題点について資料を作成する。

課題１．過疎の進む中山間地域においては、地元中学や周辺中学も含めた連携型の中高一貫教育は、生徒増の一助にはならない。

２．県内の地域高校、特に小規模校は現在「２学級募集」への移行期であり、学校運営や教育活動に大きな影響が予想される。

３．中高一貫教育が受験競争の緩和や「ゆとりある教育」を可能にするとは考えにくく、大学入試や大学教育の在り方を含めた教育改革と学歴主義社会の解消が必要である。

４．児童・生徒、保護者、地域住民の学校教育に対するニーズや地域の実情は何かを中高双方で確認し、中高一貫教育がもたらす影響について検討する必要がある。

５．小学校高学年の児童をもつ地域の保護者が、中高一貫教育にどのような期待を持ち、イメージするか。

〔資料１０〕

１０　まとめと考察

（１）　中高一貫教育の意義（趣旨）について
－中央教育審議会答申、文部省の見解に照らして－

中央教育審議会は「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」と題する第二次答申（平成９年６月２６日）の中で、**中高一貫教育について選択的導入を図る**　ことを提言している。この中で、**中高一貫教育は子供たちにゆとりある学校生活をもたらし、じっくり学ぶことを希望する子供たちに対して、個性と創造性を伸ばす教育をより充実させることが期待できる**　とし、現行の６・３・３制における中等教育の利点と意義を認めた上で、中高一貫教育は中等教育育全体の多様化・複線化を進めるために重要であるとしている。

それを受けて文部省は、中高一貫教育の導入の背景として次のように示した。**今日、ほとんどの生徒が高等学校に進学する中で、その能力・適性、興味・関心、進路希望などが分化して行く時期の生徒たちにどのような中等教育の場を用意するのかは、教育上極めて重要な課題である。**一人一人の生徒の個性を伸ばす観点から、これまでにも、

①高等学校における総合学科や単位制高校の設置など特色ある高校づくり
②選択幅の広い教育課程の編成
③高等学校入学者選抜の改善

など、中等教育を多様で柔軟なものにするための改革が積極的に推進されてきた。

現行の中学校・高等学校の制度も国民の間に定着し、この制度の下で様々な仕組みの改善が図られているところである。

しかし、こうした高等学校教育の学科、内容、履修方法などに関する改善措置に止まらず、学校制度として　**６年間を通じた異年齢の生徒が学校生活を送り、６年間の計画的・継続的な教育指導を行う仕組みを整え、より生徒の個性を伸ばす教育を展開し得るようにすることも必要**　と考えたのが、今回の中高一貫教育の選択的導入の理由である。

〔「教育委員会月報３」(NO.590)「中高一貫教育がはじまります」(文部省)より〕

また、連携型の中高一貫教育については、「連携型の基本的な方向」（文部省「中高一貫教育Ｑ＆Ａ・その二」）として以下のように示している。

（１）現行の学校制度を前提とするものであり、法律改正（学校教育法の一部改正）の対象ではない。
（２）連携型の中高一貫教育は、既存の中学校と高等学校の間で行われるものであるので、その教育課程については、中等教育学校や併設型の中学校・高等学校のような特例措置を適用することはしない。
（３）中学校・高等学校の学習指導要領の枠内で、選択教科の開設などにより特色ある教育課程を編成するような工夫をする。
（４）入学者選抜の簡便な方法の具体的な扱いは今後検討する。

（２）中高一貫教育「連携型」の実践研究校としての意義（趣旨）について

①実践研究校に指定された信州新町中学校と犀峡高校のある信州新町及び周辺町村は、過疎が一段と進み学童児童・生徒も将来的にも減少傾向にある。そして、ここ数年、地元中学生の犀峡高校へ入学する率は５０％前後を推移し、長野市内や周辺の高校へ１時間余の時間と高い交通費をかけて通学している生徒も数多くいる。大学・上級学校への進学や資格取得、厳しいしつけ教育等を求めて地区外の普通高校や職業高校、私立高校へ進学を希望する中学生や保護者も、益々増える傾向にある。
そこで、地元の中学校と高校が様々な教育活動で連携を深め、地域全体に地元の子どもたちを高校までは地元で学ばせ、地域で育てるという気運を盛り上げ、また、子どもたちも地元の高校で学ぼうとする意欲を高め、小規模校（小・中・高校）の活性化と過疎地域における若者の定着など、地域の期待に応える教育の充実や魅力ある学校づくりが一層求められている。

②今日、高校進学率の上昇でほとんどの生徒が高校に進学する時代になった。それに伴って、小・中学校時代の不登校や学校不適応の生徒も年々増加し、いじめや暴力などの問題行動も後を絶たない状況にある。加えて、学習や学校生活に対する意欲を見出せず高校を中退する生徒も増加し、目的もなく毎日を送る生徒が増えている。　**何のために学ぶのか、将来何をしたいのかを中学時代から継続して考えることや高校への進路目的を明確化させる指導が一層重要になっている。**

③これまで義務教育後半３年間の中学における学習と高校入学後の学習が、高校入試によりその継続性や積み重ねが明確でなかったり、やや断絶していると指摘されていた。そして、中学での選択科目の拡大に伴い、高校での学習への接続のためにも中高双方の授業形態や進め方、学習内容について教師が互いに知る必要がある。また、学習教材や内容の開発と工夫を互いの授業を公開することで授業の様子や進め方について検討したり、中高の生徒がどこでつまずいていたり伸びているのかを知り、教材づくりや学習指導などに役立たせるために日常的に研究・交流することが大切である。そして、**基礎学力の定着と学力の向上を基本に据えながら、地域や学校の特性や特色を生かした教育の実践や中高の６年間を見通した共通のテーマを学習することで地域や郷土を理解し、やがては郷土や地域の発展に寄与し得る人材の育成ができれば意義深いと考える。**

④地域の中学校と高校が教育内容で継続な連携を図り、授業やクラブ活動、学校行事等でも教師と生徒が相互交流することが可能となり、６年間の関わりの中で継続的な指導が可能となる。また、生徒減により中高とも小規模校化が進む中、学校全体の活力が失われたり、教育活動の停滞や低下が懸念されている。生徒の相互交流により活力を維持し、教員の相互交流により人材の補完と施設・設備の相互活用が図られる。

⑤高校の特色化が進む中、中学での進路指導において生徒及び進路担当の教師が高校での学習内容や学校生活全般について実際に体験したり（体験学習・授業参観・交流授業等）目にすることで将来の具体的な高校生活をイメージするような機会が必要である。その上で高校への進学指導をより細かくし、連携を深めながら互いの情報提供を行うことも大切である。

（３）中高一貫教育「連携型」の趣旨を生かした教育活動と設置形態について

先にも示したとおり、地域全体の過疎が一層進み、少子化に伴って町の児童生徒も減少が続く信州新町地区にあって、信州新町中学、犀峡高校とも生徒数の減少が将来にわたって継続するものと考えられる。

〔資料１１〕

しかし、このような地域にある中学、高校の存続活性化は地域の発展に大きく影響を及ぼし、特に高校の存在意義は大きく、地元住民はじめ町の議員や行政、教育関係者の支援と期待は大きい。

このような複雑で厳しい現状の下で当委員会は県研究会議の指定を受け、文部省や県が提示した連携型の中高一貫教育を研究、検討してきた。しかし、高校受験の影響を受けず「ゆとり」ある学校生活を送るために中高の６年間を継続し、中高一貫を目的とした学校の変革や教育課程、教育内容の変換にはかなりの時間と研究が必要であり、先に示したようにその達成には多くの困難が予想され、乗り越えなければならない課題も多い。

地理的な要件の中で生徒募集が極めて厳しくなることも予想されるが、あえて犀峡高校を１学年２学級規模（７０～８０人・全校生徒２００人程度）の学校と想定しながら、信州新町中学（将来的には学校規模の縮小が予想される複数の周辺中学を含めた連携教育や条件によっては近隣の地域高校同士の連携も考えられる）との **『緩やかな連携型の中高一貫教育』** が考えられる。

具体的には、中高双方に教員定数以外に「連携教育」（仮称:派遣授業又は出張授業）に携わる教員（中高兼務など）を相当数配置することで、授業では基礎学力の定着と学力の向上を目的にして、中高の学習の連続性が高く学力差も生じ易い、国語・数学・英語での習熟度別授業や特色ある教科・科目（郷土や地域を共通の学習テーマにした「郷土学習」（地域の自然風土・歴史・文化・産業など）や体育（カヌーの授業など）、芸術、技術家庭科等の実技教科や情報教育でのＴ・Ｔ（チーム・ティーチング）や「少人数教育」（生徒一人一人に目が行き届き、生徒理解や指導がしやすい）によるきめ細かな学習指導、中高双方のＡＥＴによる交流（授業）も考えられ、生徒会やクラブ活動での生徒同士の交流や合同練習、ボランティア活動、クラブ指導者の相互派遣、芸術鑑賞などの学校行事の合同開催も考えられる。また、「郷土学習」や「総合的な学習の時間」や中高の「選択科目」での中高のＴ・Ｔによる合同授業や地域の教育力（社会人講師）の活用も考えられる。

何よりも生徒・教職員はもとより、地域や地域住民の中高連携への意識が高まり、地域の活性化につながるとともに、学校が地域の専門的な教育機関として関係機関や団体と連携して中心的な役割を担い、学校の教育力や施設・設備を開放しての地域の教育センターや生涯学習センターとしても期待できる。

〔資料１２〕

（４）今後の課題と対応について

本年度４月以来、県より研究実践校に指定され、様々な視点より検討を重ねてきた。中高一貫を目的にした一貫教育の実施には様々な条件整備が必要であり、中高双方の学校改革（教育課程、教育内容、教員体制、行事変更等）や教職員（地域社会・住民も含めた）の意識改革に時間と更なる研究が必要であり、乗り越えなければならない課題も多い。

そこで、

①連携教育を中心にした中高及び地域での共同の体制づくり

→連携教育を始めるにあたっては、地域及び中高の教職員全員が“地域のこども（生徒）は地域で育てる”という認識に立ち、前年度の早い段階から中高の関係者が中心になって準備し、条件の整ったところからじっくりと始めることが大切である。当面、

・新学期、中高の合同会議┐
・小中高の連絡会・研究会 ├の開催
・互いの学校を学習する会┘

将来的には地域教育研究センター（仮称）を設置し、中高の連携教育の在り方や内容の検討、調整を中心に活動したり、周辺町村を含めた幼保・小・中・高の連携や地域教育の活性化、児童・生徒の育成について幅広く研究する。

②高校のクラス減及び中学の少人数化に伴って、連携教育に関わる教員の確保。

→中高双方に相当数の教員加配が必要である。当面、習熟度別授業やＴ・Ｔの必要な教科で加配による中高兼務教員や高校から中学へ出向いての授業や中学校同士の連携も考えられる。

③中高双方の教育課程における共通の科目（「郷土学習」や「地域学習」など）の選定や学習内容の検討・研究。地域の教育力（社会人講師）の活用。

→中高双方で教科、担当者を決め、長期的な展望で共同研究する。
地域の教育素材（教材）や教育力の発掘と活用も併せて研究する。

④生徒会、クラブ連携の強化と行事の連携

→引き続き、できるところから可能な範囲で実践する。ボランティア活動や行事については、前年度の早い段階から計画、調整する。

⑤地域に開かれた学校づくり

→地域教育研究センター（仮称）を中心に学校の施設・設備を広く地域住民に開放し、学校５日制への対応や地域の活性化と生涯学習の場とするよう研究する。また、学校の教育活動への住民参加（公開授業・社会人講師・学校協議会への参加等）や連携、「どのような地域と学校を創るのか」の地域の住民や生徒、保護者、中高の教職員の意見や要望を取り入れた学校づくりを目指す。

→地元のケーブルテレビを利用したＰＲや授業への活用。

（５）地域の動向について

先に示した通り、地域の過疎化と高齢化が一段と進み、さらに少子化に伴って若者の人口や学童児童・生徒の減少傾向が続く地域としては、高等学校も含め学校の存続・活性化と地域の人づくり、教育づくりは２１世紀に向けた大きな課題である。地域に根付いた学校として長く地域住民に親しまれ、支えられてきた犀峡高校がこの地域の教育・文化の中心として、また維持発展に貢献してきたことは地域住民も認めるところである。近年、犀川の自然を利用したカヌー教室の活動やカヌーの全国大会の開催は町と学校が連携して実現したことでもあり、高校におけるカヌー部の国体への連続出場や体育でのカヌーの授業は町の協力なくしては成り立たない。その他にも「犀峡高校を発展させる会」を中心に周辺市町村からの支援と援助は大きいものがある。

また、同窓会を中心に母校への支援の輪が広がり、ＰＴＡも様々な活動の中で生徒の健全育成と活性化に全力を注いでおり、期待も大きい。

〔資料１３〕 ※広報信州新町(1999.9.4)より　中高一貫教育について特集

11 委員会の反省

・今回の中高一貫教育実践校指定が前年度の学年末であったため、中高双方の研究委員会が組織され、本格的な活動が始められたのは新年度早々で、中高一貫の全体像や概要、実践すべき内容が委員会でも正確に把握できないままにスタートした。よって、４月以来、中高一貫教育に関する学習に多くの時間が割かれ、年間を通じて実践するような活動（教科連携や授業連携など）や全体の行事に関わる活動が年間行事の過密さや教員の調整と日程が立たず、実践できないことや不十分なところが多かった。
また、中高双方の委員の調整がつかなかったりで、全員揃って委員会の開催ができず意見交換や課題の検討が思うままに進められず、委員も含め中高双方の全教職員の意見が反映されるところまで到達できず、意見の調整も大変であった。

・研究委員の校務が多忙であり（特に中学は忙しい）、校内の委員会が思うように持てなかった。
・先進校の視察や講演会を通してようやく明らかになった点が多く、それまで入手した資料では概略は理解できても詳細な点（地域や学校のおかれている状況や実態、授業交流の内容と成果等）が不明であった。

・高校側が先導役になっており、中高同一の認識や立場で取り組むことが難しかった。

・多忙な状況にあるが、項目別の小委員会（例えば、教育課程の連携、入学者選抜、教職員・生徒の交流等）を組織し、研究を進めた方が中高の多くの教職員が関わり、幅広く意見が集約できた。

・中高とも小規模校で、特に、地域高校（犀峡高校）の置かれている状況が大変厳しく、また、単年度の実践研究ではテーマも大きく、研究と成果は限られたものとなった。
・異年齢の集団が中高の６年間における教育活動の中で社会性を育むことも期待されているが、地域の小規模な学校の中で幼い頃から同じ仲間で固定された生活を送ってきたために、新たな生活指導での問題や馴染めない子どもが生じる可能性も心配される。

信州新町中・犀峡高校

交流授業報告書

中高一貫教育研究委員会

《国　語》

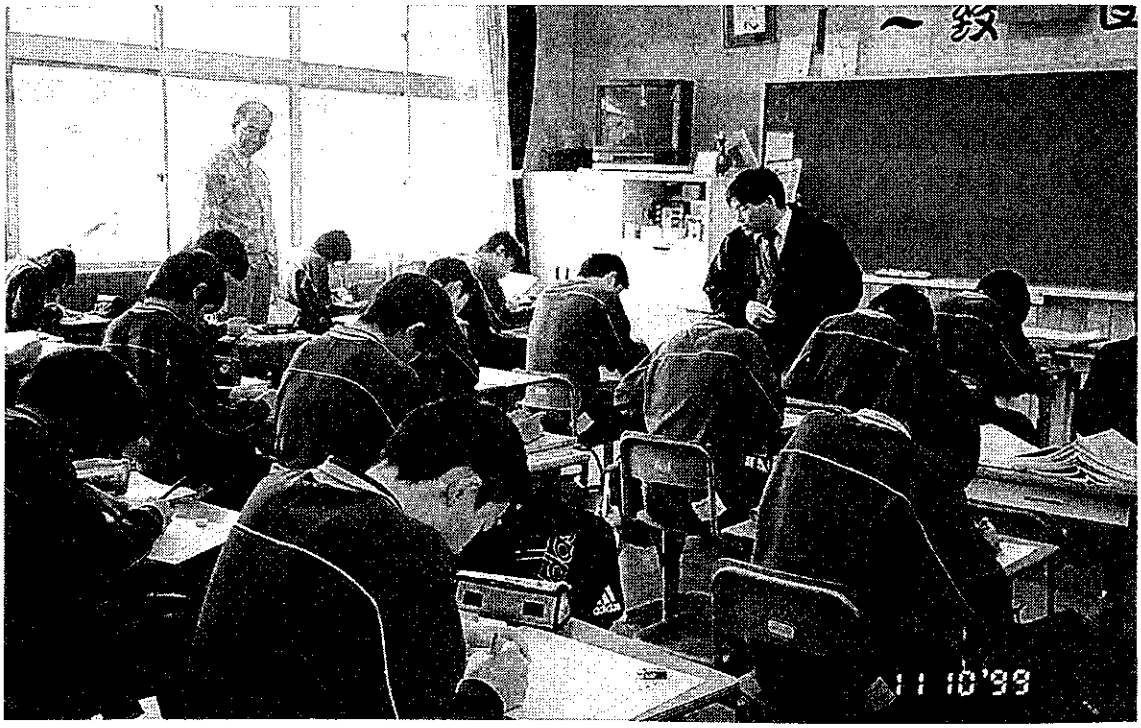
◇報 告 者：田中泰徳（犀峡高校）
◇実 施 日：１１月１０日（水）・１１日（木）
◇場　　所：信州新町中学校・犀峡高等学校
◇対象学年：信州新町中　３年２組　３３名
◇科　　目：国　語
◇授 業 者：○田中泰徳（高校）・中山久貴（中学）
◇授業テーマ:中高におけるＴ・Ｔ（ティームティーチング）の実践
◇授業内容：（１）１０日は、高校入試の問題を取り上げ、漢字を中心として内容読解、古文、鑑賞文の取り組み方を解説した。
（２）１１日は、私の「座右の銘」というテーマで各自が座右の銘を考え大型の短冊で発表、説明した。
◇感想・反省
高校側としては、初めて接する生徒なので緊張してやりにくい面もあったが、中学側はかつての教え子を再び教えるということもあり、生徒も懐かしがっていて嬉々として取り組む様子が見られた。高校側からの交流授業も１年次より年１回ぐらい同じクラスで取り組むなどすれば指導もしやすいし、積み重ねもできて行くような気がします。
（授業資料略）

◇報 告 者：中山久貴（信州新町中）
◇実 施 日：１１月１０日（水）・１１日（木）
◇場　　所：信州新町中学校・犀峡高等学校
◇対象学年：犀峡高校３年総合コース　１１名
◇科　　目：国語表現
◇授 業 者：○中山久貴（中学）・田中泰徳（高校）
◇授業テーマ:中高におけるＴ・Ｔ（ティームティーチング）の実践
◇授業内容：（１）高等学校入学検定について
H11年度入学試験をもとに、これからの学習で気をつけることの助言。
漢字の出題範囲を中心に常用漢字の５・６級を反復練習することの必要性を学ぶ。さらに、長文問題の解法に触れる。
※目前に迫った高校入学検定に向けて、具体的な学習方法を教えられ刺激になったようだ。また、高校の講義調の授業も新鮮であった。
中学にて（田中教諭）１１月１０日（水）
（２）「私の座右の銘」
自分の大切な言葉を考え、発表し合う。
事前に、「座右の銘」を考えておくように指示しておく。それぞれの銘を選んだ理由やその言葉に込めた思いをコメントとして発表し、聞き合う。
※国語表現の授業ということもあり、１１名の仲間の考えていることを発表し合えたこと、聞き合えたことは生徒にとっても有意義であった。
高校にて（中山）１１月１１日（木）

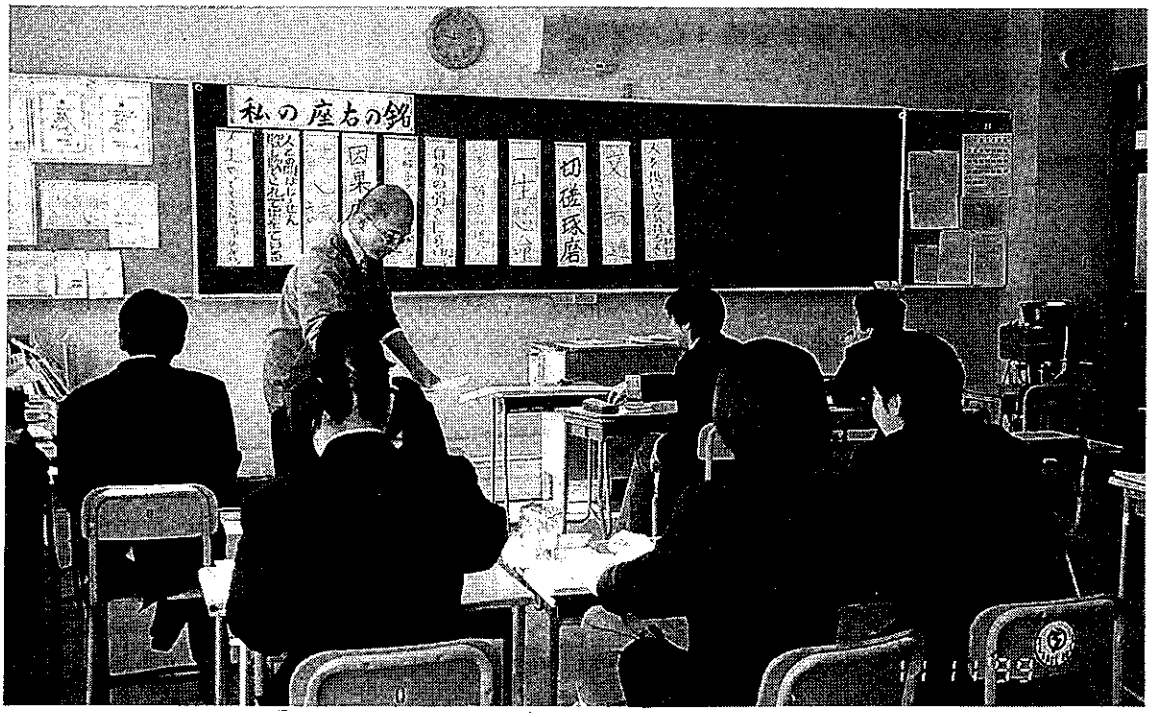
（３）課題

- ＴＴということで１時間ずつの交換授業であった。それぞれの負担を考えればこの程度でいいだろう。
- 生徒も授業者自身も新鮮な思いで授業に臨める。また、中高の教員同士の考えの交換もできる。
- 毎年２教科程度の交換で適当であろう。（ローテーションしながら）
- 現段階では、恒常的に行うということよりも年間の学習行事として行って行くことが適当と考える。

授業のスナップより



信州新町中学での国語の授業



犀峡高校での国語表現の授業

《家庭科》

◇報 告 者：大畑みどり（信州新町中）
◇実 施 日：１０月２２日（金）・２８日（木）
◇場　　所：信州新町中学校・犀峡高等学校
◇対象学年：３年総合コース
◇科　　目：「選択食物」（総合食物）
◇授 業 者：○大畑みどり（信州新町中）・池森貴代子（犀峡高校）
◇授業テーマ：「郷土食にトライ」
◇授業内容：

（1）概要－「郷土食にトライ」というテーマで１０月２２日（金）・２８日（木）、中高家庭科のティームティーチングによる交流授業が行われた。

１０月２２日（金）は犀峡高校３年選択食物（総合食物）で中学校教諭がＲＴとなり「ソバ打ち」の授業、１０月２８日（木）は信州新町中学校２年食物で高校教諭がＲＴとなり「にらせんべい」の授業をいずれも２時間ずつ行った。

授業に先立ち、６月２９日（火）中高の合同会議（教科別）が持たれ、１０月１日に具体的な授業の打ち合わせ会、その後も双方の授業参観するなどして情報交換し、当日に至った。

今回の交流授業では、中高の家庭科のカリキュラムについて話し合い（情報交換）、中高の関連や発展性を考え、ティームティーチングによる上記の題材を選定した。

当日は公開授業とし、中高の先生方で授業を見合った。

（2）授業の感想・問題点

①中高合同会議（合同教科会）を持ったり、双方の授業を見たりすることで中高のカリキュラムや扱っている題材等について知ることができ、また、問題点もわかり改善できる。
②交流授業により生徒の実態がつかめ、地域校として連携した指導が可能。
③Ｔ－Ｔによりきめ細かな指導が可能。お互いの専門性を生かして指導に当たられる。
④中高の６年間のスパンで考えられる。（カリキュラム、指導等）
⑤中高の年間計画や日課・時間割等異なるため、交流授業やティームティーチングを行うためには時間的に無理があり、難しい。特に年間通してとなるとかなり難しい。
⑥中高の交流授業を行うためには、特別予算が必要と思われる。
⑦非免の先生が指導に当たらなければならない学校があるが、中高の交流で、今後指導に当たられないか。（Ｔ－Ｔ等）

（3）生徒の感想・意見

・わかりやすくてよかった。
・２人の先生がいるので、聞きたいことがたくさん聞けてよかった。
・年に１回ぐらいやるのはいいことだと思う。
・もっといっぱいやってほしい。
・双方の先生が作り方を知らないとＴ－Ｔの意味がないと思う。声をかけやすい点はよい。
・２人の先生がいて、安心してできた。
・もっといろいろな教科でやってみたいと思った。
・たびたびやってほしい。
・先生が２人いて質問もしやすかった。　　（授業資料略）

◇報 告 者：池森貴代子
◇実 施 日：１０月２８日（木）
◇場　　所：信州新町中学　調理室・被服室
◇対象学年：　　〃　　２年２組　３３人
◇科　　目：家庭
◇授 業 者：○池森貴代子・大畑みどり
◇授業テーマ：郷土食作り
◇授業内容：食物領域－郷土食を知る「にらせんべい作り」

・にらせんべの作り方の説明（地粉を使った料理）
・班ごとに作業（生地を等分し、一枚一枚必ず焼く）
・試食
・感想記入、発表（自己紹介も含めて）

◇感想・反省

- 身支度、あいさつがきちんとできる。
- 説明をしっかり聞いていて、説明通りに作業を進めることができる。
- わからない所は、すぐになんでも聞いてくれた。
- 給食があるからと思い材料を少なめにしたが、出来上がったにらせんべいを先生方にあげる生徒達がいて、もう少し多めにすればよかったと申し訳なく思った。偉い生徒たちで感動した。
- 食べ終わったあと時間が余ったので、感想文の発表と自己紹介をしてもらったが、思いがけず生徒たちとたくさん話ができてよかった。
- 自分自身としては、教材不足で反省している点が多いが、このような機会を与えて下さった先生方と一緒に授業をしてくれた生徒たち、大畑先生に心より感謝している。
  とても楽しく、そして勉強になりました。ありがとうございました。

家庭科 交流授業スナップより

中学における「ニラせんべい」

高校における大畑・池森先生による「ソバ打ち」の授業

資料２
[F. NO. 158]

信州新町中学校
３年生のみなさんへ

長野県犀峡高等学校長　宮本 康夫

～犀峡高校のクラブ活動を体験してみませんか～

犀峡高校クラブ体験入部について

下記の要領でクラブ体験入部を実施します。体育系の部活動に参加している人は中体連の各種大会が一区切りしたところかと思いますので、参加希望者は下記の「参加希望票」に記入のうえ、担任の先生に提出してください。準備の都合がありますので、提出締め切りは６月２５日(金)です。

記

◆実施日：７月３日（土）・１７日（土）　いずれも午後２時より開始。　（５時終了予定です。）
◆会　場：犀峡高校体育館・グランド・テニスコート・弓道場他
◆実施クラブ：①野　球（見学のみ）　②卓　球　③バスケットボール　④バレーボール
⑤弓　道（見学のみ）　⑥テニス（硬式）　⑦ソフトテニス　⑧カヌー
⑨ボランティアサークル
※不明な点や集合等は担任の先生に聞いてください。　〔右表参照〕

・・・・・・・キ・・・リ・・・ト・・・リ・・・セ・・・ン・・・・・・・

犀峡高校クラブ体験入部「参加希望票」

３年＿＿＿組　NO.＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

参加希望のクラブと参加日に○をしてください。

	３日	17日		３日	17日
①野　球（見学のみ）			⑥テニス（硬式）		
②卓　球			⑦ソフトテニス		
③バスケットボール			⑧カヌー		
④バレーボール			⑨ボランティア		
⑤弓　道（見学のみ）					

クラブ名	顧　問 指導者	実施日 ３日	17日	雨天の場合	内　　容　等
①野球(※見学のみ)	成竹・荒川他	○	○	×	夏の大会前の練習を見学してもらいます。
②卓　球	長田・堀内	○	○	○	高校生と合同で練習します。
③バスケットボール	春原・宮崎	○	○	○	ボールは中学で使用しているものを使用。
④バレーボール	才口・赤羽	×	○	○	運動着・体育館シューズ・４号ボール 初心者でもかまいません。１５人程度。
⑤弓道(※見学のみ)	鶴田・吉田	○	○	○	日頃の練習を見学してもらいます。
⑥テニス(硬式)	玉本・久保田	○	○	×	用具は準備します。底の平らな運動靴
⑦ソフトテニス	西村	×	○	×	
⑧カヌー	武江 北沢	○	○	×	濡れてもよい服装。レーシングカヌーに乗ることを目標にします。１０人程度。 琅鶴湖又は本校プールで実施します。
⑨ボランティアｻｰｸﾙ	吉田	○	○	○	昨年度の活動や日頃の活動を紹介します。

※今回は実施しませんが、上記のクラブのほかに
《陸上・剣道・吹奏楽・美術・書道・写真・茶道》があります。
※実際に練習に参加する場合は、運動着で参加してください。
見学、ボランティアは制服でかまいません。　連絡先：☎262-2044（担当者：富岡）

クラブ体験入部の感想・反省より

《中学分》

〔生徒の感想より（抜粋）〕

○　矢を射った時の先輩の姿はとてもかっこよかったです。「構え」とか「打起し」と難しい言葉もたくさんありましたが、今回、弓道を見学して益々弓道をやってみたくなりました。教頭先生自ら教えて下さいました。先輩からも「弓道向きだよ」と言われました。この見学が無意味なものにならないようにしたいと思います。
　弓道は格好いいぞ！（弓道）

○　最後に高校生と試合をしました。試合をやってみて、やっぱり高校生は強いなあと思いました。この体験で、僕は卓球がもっと好きになり、自分の力もアップしたいと思いました。（卓球）

○　部活体験で、僕は卓球部に行きました。理由は、部活が卓球だったことと高校へ行ったときに卓球をするかもしれないからです。僕は高校生と試合をしてもらいました。全力で試合をしましたが、すぐに負けてしまいました。僕はこの部活体験に行って高校に行ったらもっともっと体力をつけて頑張らなければいけないことが分かったのでよかった。（卓球）

○　僕はバスケが好きだから、この部活体験に行ったのですが、その時よりももっとバスケが好きになれたような気がするし、高校のバスケもどのようなものなのかわかったので部活体験学習に行って良かったと思います。（男子バスケ）

○　僕も犀峡高校でバスケ部に入りたいので終わらせないで下さい。（男子バスケ）

〔反省〕

1．期日：「３学年クラブ体験入部」として行うならこの時期（中体連が終わったころから７月上旬）がよい。

2．日程：よい

3．内容：部により見学、体験等いろいろあってよい。
　中には夏休みの練習に誘ってくれた部があった。（実際には参加できなかった）
　部活動の交流は有効。

《高校分》

クラブ名：弓道
参加生徒数：１名（引率職員２名）
反省・意見：こちら側で実際に指導できるのは、教頭先生だけなので教頭先生が見える時間まで関われないのではないかと思っていましたが、２年生が上手く接してくれました。短い時間ですので、クラブ体験というより交流という意味でよかったと思います。

クラブ名：女子バスケット
参加生徒数：２名
反省・意見：クラブとしては不十分な活動しかできていませんが、この日はよく協力してくれました。中学生にとってバスケットを通じて魅力の感じる学校という思いから考えるとこの体験入部は不安な点もありました。

クラブ名：女子バレー
参加生徒数：２名（引率職員１名）
反省・意見：非常に一生懸命に練習をやってくれました。
　この生徒達が全員入部してくれたらと思います。

信州新町中学校

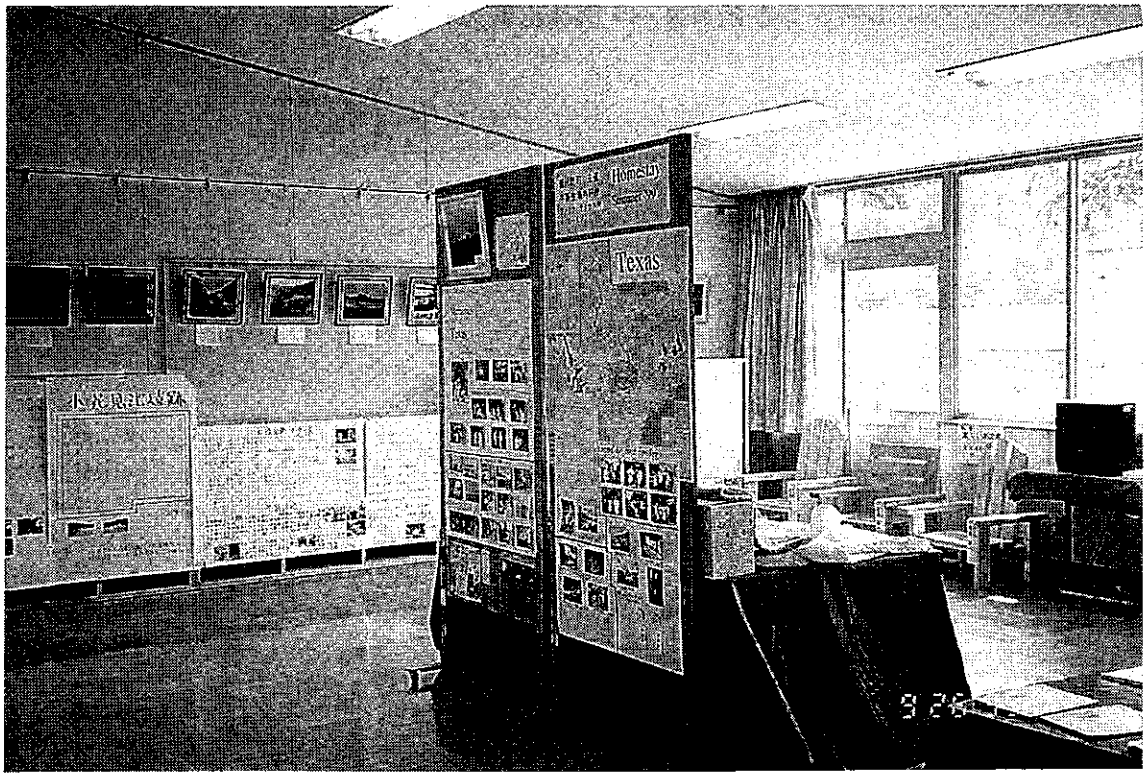
「愛郷祭」への参加について

1．日程：９月２６日（日）一般開放 《準備：２４日（金）１６：００～》

2．内容：①「琅鶴祭」の展示物より
- 「地域」の授業より
  （手芸・楽しい木工芸・地域研究）
- 第３６回、第３７回のポスターコンクール優秀作品
- 書道部作品
- 写真部作品
- ビデオ
- 語学研修スナップ
- 「琅鶴祭」スナップ

②レーシングカヌーと大阪「なみはや」国体出場スナップの展示
③学級通信の展示
④学校生活スナップ
⑤犀峡高校を扱った新聞切り抜き記事
⑥美術科生徒作品（写真）集
⑦歴代卒業アルバム（過去５年間ぐらい）
⑧学校案内

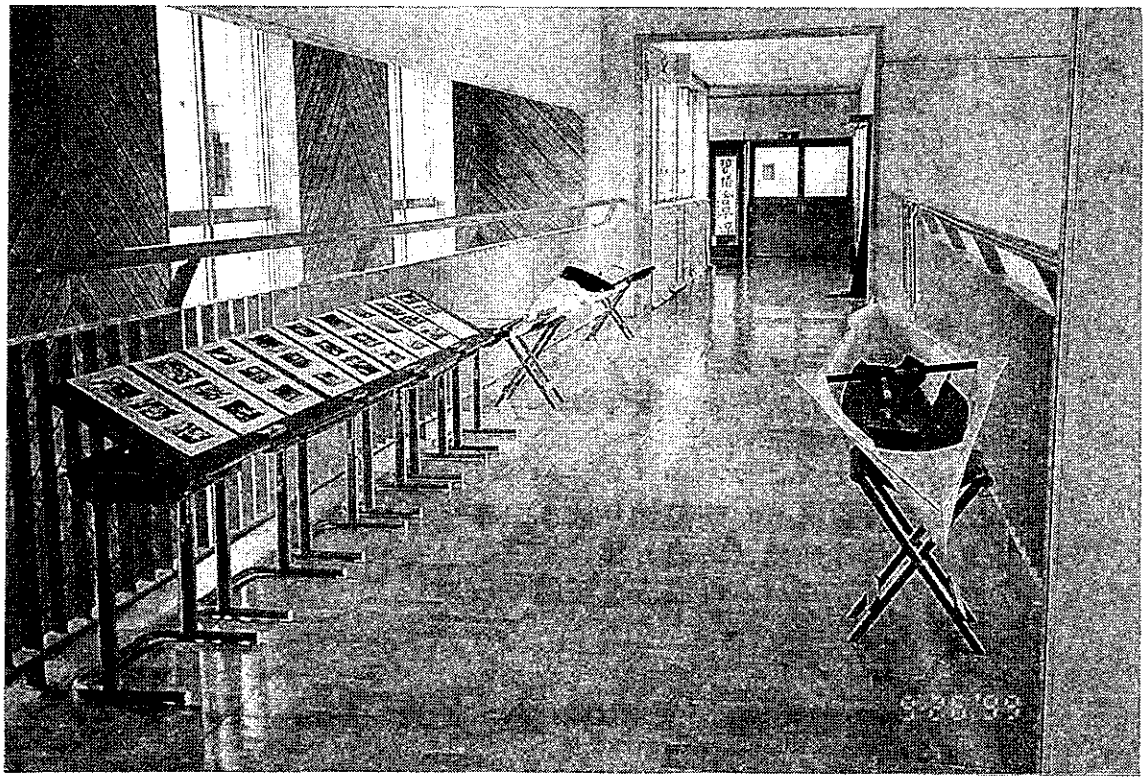
「愛郷祭」（9/26）スナップより



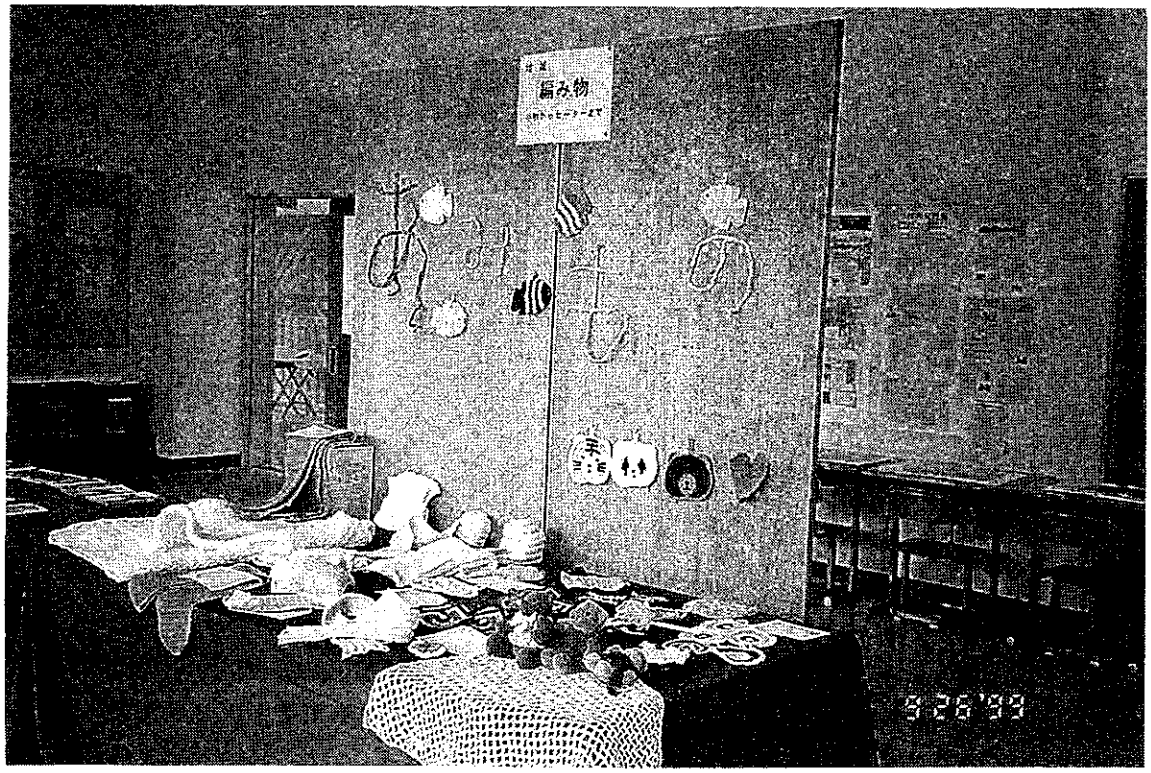
「海外語学研修」の紹介と「地域」の「地域学習」「楽しい木工芸」、「写真クラブ」の展示

3．感想

- 中学生にとっては高校生（卒業生）や高校での学校生活に触れるいい機会となって関心を持って見学できた。
- 展示に工夫がみられ、よい展示空間であった。
- テストの時期に重なったため、展示の準備に犀峡の生徒の手が借りれず残念であった。



レーシング用カヌー・国体出場スナップの展示



「地域」の「編み物」の作品展示

資料４

1999.6.29　於：信州新町役場　　[F.NO.159]

信州新町中学・犀峡高校合同会議

〔同和教育研究集会終了後～５：３０〕

次第：１）学校長挨拶　　小林秀雄 信州新町中学校長

２）研究委員紹介　　略 別紙にて

３）経過報告　　〃　〃

４）教科別（＋養護）分科会

①自己紹介

②教科間連携について

③中高一貫教育の課題と問題点

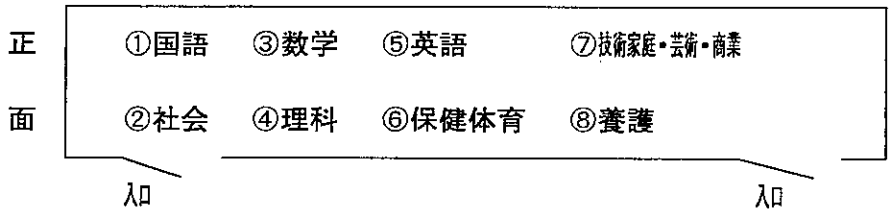
④その他

５）その他、諸連絡

◇分科会　　◎座長（司会・記録）

教　科	中　学　校	高　校
①国語	中山・水倉	赤羽・◎田中・吉原・長沢
②社会	松本	荒川・長田・◎成竹・下嵜・堀内
③数学	小出・河西	久保田・◎武江・宮崎
④理科	濱	◎北沢・春原・玉本・村石
⑤英語	◎成田・近藤・ﾗﾝﾃﾞｨ ﾉｰﾄﾝ	鶴田・下田・宮坂・ｺｰﾄﾆｰ ｼﾞｪﾆﾝｸﾞｽ
⑥保健体育	土屋	才口・西村・◎米倉
⑦技術家庭・芸術・商業	田中・大畑・上原・久郷	池森・丸山・室星・◎富岡・中村・松林
⑧養護	岩方	◎吉田

◇会場



[6/29 信州新町中学・犀峡高校 合同会議資料]

中高一貫教育教育に関するアンケート調査のまとめ

《研究課題》

①６年間を見通した、地域の特色を生かした中学校と高等学校の連携と教育活動の在り方について

〔中学校〕

〔高校〕

・高校側では、どうしても地元生徒の確保が優先される。県も地域高校の存続や地域の活性化に狙いがあるようだが、連携を中心に、地域の実情を考慮しながら中高双方の力量や範囲で現在どのような連携が可能なのかを試行錯誤する段階ではないか。
・魅力ある中高一貫教育の創造が必須。特に、他の高校ない教育課程、特色ある科目等の教育内容や施設設備の充実　※最新教育機器の充実（コンピューター教育やインターネットの利用、テレビ電話会議など）
・教育課程の連携（編成）の在り方－授業の交流や共同実施等の教職員間の交流－高知県では、数・英など進度の早い中学生には高校の教師が、遅い高校生には中学の教師が教え直し、基礎学力の定着を目指している。
・過疎地域にある小規模地域高校や住民にとっては、生徒数の確保や学校の存続、地域教育の核としての存在となりまた、保護者にとって６年間を見通した教育が保障される。
・６年間の中高一貫教育で漢字検定や英語検定、ワープロ検定などの各種検定・資格取得への継続的な受験体制やチャレンジ。
・６年間を見通した同和、人権、平和教育や性教育、保健教育の実施。合同の講演会や見学会、映画鑑賞等の実施。
・　　〃　　情報処理（コンピューター）教育。
・学習指導、生活指導の連携（合同街頭指導等）や情報交換
・図書館の本の貸し出し連携。

②特色ある教科・科目の開設と指導形態の工夫について

〔中学校〕

〔高校〕

・地域の特色を生かした教科・科目の検討や地域の教育力（社会人講師）の活用
　ex. 郷土学習（地域の自然・歴史・文化・産業）、社会・介護福祉（久米路荘での体験学習）、環境教育（合同の清掃活動や環境学習）、体験学習。
・上記教材の共同研究やテキストの作成。
・特設科目○○の設置で、中高の両方の授業を担当する教員（常勤又は非常勤）の配置。
　→将来的には中高兼務教員（？）
・現在、犀峡の「地域」で行っているような授業内容の中高への拡大と地元の施設や教育力の活用。
　（中学の総合学習との関連）

③生徒及び教職員の連携と交流について

〔中学校〕

〔高校〕

・中高ともに教員の回転（移動）が早く、なかなか連携や継続的な協力関係の維持が難しい。信州新町中、犀峡高校出身の教師を全県から集めるとか、地元に定住出来る状況を作るとかの努力が必要。また、中高の教員の日常的な交流が絶対条件である。（いままで顔も名前も知らない関係が続き、責任を感ずる。）
・中学校、高校の教育内容（教育課程、コース制、単位制、総合学科、クラブ活動等）への相互の提言
　→中高教育のプロジェクトチーム
・特別活動における連携の在り方－生徒会活動やクラブ活動における生徒間の交流－
　ex. クラブ活動における合同練習（合宿）、チャレンジカヌー合宿、ボランティア活動、クラブ指導者の交流、中高合同学力向上サマーキャンプ、合同清掃美化作業、合同体育祭（文化祭）、合同芸術鑑賞、合同発表会リーダーの育成、クラブ合同発表展
・土曜日の午後や土曜休日だけでも双方の施設を使って合同の活動ができないか。文化系クラブも含めて活性化。中学生は高校生から技術面を吸収できるし、高校生は指導力を発揮できる。
・中学生への犀峡高校における教育内容のＰＲで、より犀峡を身近に感じてくれれば意味がある。
・６年間（12年間）同一集団の弊害よりも、まとまりや活力を生かす方向へ意識改革をしたらどうか。
・地元中高間の交流人事は困難点が多い。（３年間の期限付など）
・定期的な教科会、授業参観や校内教研の交流。教科書の交換。
・合同作品展（現在年一回、新町美術館で実施）

④中高一貫教育の導入と実施形態（中等学校型や併設型の可能性も含めて）について

〔中学校〕

〔高校〕
- 高校受験に際して選択肢としての中高一貫教育校（高校）が、連携した中学校からの入学者がある程度確保（数字としては50％以上か）できなければ全く意味がなく、導入は難しい。
- 「高校教育の改善充実について」で示されたⅢ．生徒数の減少への対応　１の(2)学校配置の方針『学校規模の下限、１学年２学級』と学校統廃合との関連

⑤入学者決定の在り方について（その方法と内容、問題点）

〔中学校〕

〔高校〕
- 中高一貫教育校における入試と一般入試との関係とこれからの高校入試の展望は（受験競争の緩和）。
（'97年日教組の定期大会で入試廃止の方向①全ての中学校と高校の接続②学制改革）
- 現在の高校入試の分析（①適格者主義②広い通学地域③中学校教育からの断絶など①②↔高校全入運動↔高校多様化等の文部行政）と意識改革（生徒、教師、保護者）
- 中高一貫教育が希望者全入への一歩となるか。←→現在の選抜入試
- 中学校における高校入試の弊害と問題点を広く検討すべきであり、中高一貫教育によりどう改善できるのか。
- 本校においては、毎年定員割れが続いている（推薦入試、２次募集も実施）。意欲のある生徒は全員受け入れてやりたいが、高校教育に適応できない生徒（学習面、生活面）にどう対応し、高校教育を保障してやれるか。
- 簡便な選抜方法として、中高一貫教育に関わるテーマでの作文試験（郷土学習の成果など）を実施。

⑥中高一貫教育の導入に際して留意すべき点について

〔中学校〕

〔高校〕
- “改革は上からやってくる”は失敗する。生徒、保護者、地域の実情とニーズによって決まる。
- 児童、生徒、保護者、地域住民の学校教育（新町中、犀峡高）に対するニーズや地域の実情は何か。
- 児童生徒（保護者）が地元の高校に入学したがらない、敬遠する実情の認識と過疎地域における高校教育の見直し
  ※都会志向、刺激のなさ、同一集団での学校生活の継続、高校の劣等、差別、格差意識、地元敬遠など
- 保護者や児童(小)、生徒(中)に対する進路指導の在り方
- 地域住民、ＰＴＡ（児童・生徒）、教育関係者、行政機関との連携、理解と協力
  ※「地域教育推進委員会」や「○者協議会」の設置、「信州新町地区　小・中・高研究会」の開催など
- 他の近隣中学との連携の可能性とその在り方（入学者選抜方法とも合わせて）
- 中学生の高校入試の負担軽減も目的にあるが、連携中学生の意識として簡便な選抜により入試が免除された形となり高校進学への安易な考えや学力の低下、生活の乱れが予想される。無目的入学や不本意入学が増え、高校中退者増へ

※その他、要望・意見

〔中学校〕

〔高校〕
- 将来の生徒数の予想〔小、中学校（新町・大岡・生坂・信更等）の生徒数〕を資料として提示してほしい。
- 今後とも継続して交流授業が実施できるような方策の検討。
- 体験学習の在り方と内容

資料６
[F.NO.162]

[6/29 信州新町中・犀峡高校合同会議]

1999.7.13

教科別分科会のまとめと反省

〔国語〕

1．中学：水原（特殊学級、数国）、中山
　高校：吉原（１学年主任）、赤羽（２学年主任）、田中（進路係）

2．意見交換

〈中学〉・小規模校である。
・表現力が弱い。
・作文－情緒面はよく書ける。論理性が低い。
漢字－よく取り組む。例、１日１ページ
読書量－まあまあ

〈高校〉・小規模校である。
・生徒減＋他地区からの流入－生活・学習に問題。
他地区＋地元→結果的に多様な生徒集団
対策　コース制→克服しきったかどうかは不明な点も
・国語については、ほぼ中学と同様の状況。
自分で学習する（自習）の習慣ができていない。
基礎学力の欠如（漢字の音訓の意味から欠如）

◎中高一貫教育に関わり、教科間連携について
・中高の交換授業（10月頃２時間）－従来から実施。
中学：別の先生に教わるだけで刺激となる。
高校：漢字などについても高校入試につながるものを実施したい。
・高校生の実態（中学で積み残したもの）を公開し、中学での今後の補強に役立てる資料としたらどうか。
一日一日の授業の中で感じるものを負担にならない程度にまとめ中学に送る。できれば、年度末復習テストも行った方がよい。
・輪読会のような特別な授業を中高の教員全員で取り組んだらどうか。
－中高では教材の取り組み方が違うので、お互いに世界が広がるのではないか。

◎中高一貫教育についての課題と問題点について（資料参考）
新教育課程による内容の削減や総合学習の拡大化にともなって、すべての分野とかかわりを持ち、土台となる基礎教科としての国語の今後のあり方を考える必要がある。また、内容の削減においては、３年＋３年ではなく、６年間に何を教えるとかいう長い期間を念頭に置く視点で考えていく必要があること。

◎その他

〔社会〕

2．意見交換

〈中学〉・１、２年生で地理・歴史を並行して行う。３年で公民。しかし、歴史が３年１学期まで食い込む。
・小・中・高で同じことをやっているのでは？
・３年生で１時間選択の時間。郷土の勉強など

〈高校〉・教育課程の説明
・資料が多すぎて、それで嫌いになっている生徒が多い。
・生徒では、社会が

◎中高一貫教育に関わり、教科間連携について
・連携したときの教材の選別が非常に大事。
・お互いの授業見学から始めよう。

◎中高一貫教育についての課題と問題点について（資料参考）
・内容の選別と同時に内容の分担ができればすばらしいが、それを実現させるためには完全な一貫校でなければ不可能。
・地域の授業、フィールドワークを一緒にやることは可能か。
・保護者間の連携も考えられる。

◎その他

〔数学・理科〕

1．中学：久保田教頭
　高校：７人

2．意見交換

・中学、高校で重複する内容を弾力的に取り扱うことができないか。
　→この場合、他中学からの生徒との間に教育内容のズレをどうするか。

〔中学への質問〕

・初期の段階で落ちこぼれた生徒に、もう少し手厚く基礎を中心に指導できないか。
・カヌー部への働きかけをしてほしい。お互いに教員が少ないので、２校間のクラブで顧問１人で対応するというわけにはいかないのか。
・中学、高校と6年間を通しての研究、観察、観測等(主に生物、化学の分野で)ができればいいが。

〔英語〕

2．意見交換

〈中学〉会話を中心とした授業
　　自己表現、国際理解を大切にしている　｝文法的な理解、単語力が弱い

〈高校〉選択制による授業
　　ＡＥＴによるｵｰﾗﾙ指導　｝学力差が大きい。センター試験に対応できる力をつけたい。

◎中高一貫教育に関わり、教科間連携について
・中高での英語学習に対する考え方に大きな違いがある。
・今後の研究課題
　中高の授業の違いを生徒はどのように感じているかの調査
　日常的な授業参観
　ＡＥＴの交換授業等の検討

◎中高一貫教育についての課題と問題点について（資料参考）

◎その他

〔保健体育〕

2．意見交換

1）中学校は保健体育の教員が一人しかいないため、選択制の授業ができないできたが、実施したい。協力をいただけないか。
　→カリキュラムの形態がことなっているので、実際の協力は難しい。
　　方法の研究などできるだけのことはしたい。

2）中高一貫の観点から、高校で体育の授業としてやっているカヌーの基礎を中学で取り入れられないか。
　→カリキュラムの形態がことなっているので、なかなか難しい。夏休みなどに授業の一貫として取り出してやることは可能ではないか。

3）部活動は中高一貫の枠を飛び越えて、小中高一般を含めて町の教育委員会・体育協会等とタイアップして社会教育として実施することを目標にしたらどうか。ただし、当面は中高で合同で行える部活動から始められたらよいのではないか。

　中高一貫は実施し始めている。目標はそれで良いだろう。小中高一般を含めた取り組みは、カヌーはもう始まっているので、それを見習ったらどうか。

〔芸術・技術家庭・商業〕

1．中学：上原(音楽)・久郷(美術)・大畑（家庭）・田中（技術）
　高校：富岡(美術)・池森(家庭)

2．意見交換

・中学の芸術（音・美）単位数２・２・１。生徒に受験教科でない意識。
・高校の芸術は選択必修３単位だが全県的に４単位行っている。
　新学習要領では２単位に抑えられた。
・芸術をはじめ小教科で将来、地域校や小規模校で中高兼務がありはしないか危惧している。
・生徒は自分なりに判断してしまう傾向がある。
・小中高の積み重ねがなく、体系的な広がりを持った方が良い。
・小学校でやったことを中学でもやっている。教材研究が大事。生徒も活性化する。
　地域性を生かした体系的な学習へ。

・作ったモノに愛着心がなく、作品（文鎮など）を持って帰らない。（中学技術）
心がこもっていない。何を作らせたら良いのか。
総合学習と逆。我々の発想の転換が必要。
・いろいろな中学から集まってくる。針を持ったことがない生徒もいる。（高校家庭）
これから中学との連携で工夫していく。

◎中高一貫教育についての課題と問題点について（資料参考）
・交流授業の位置(目的・意味・メリット等)づけと体制作り
・中高間でインターネットを使っての授業展開はできないか。

意見・反省より

〔保健体育〕

①部活動の話まで踏み込めたのは良かった。中高一貫の枠を飛び越えて、町の教育委員会、体協等の協力を得ながら小学生からお年寄りまで入れるクラブ組織をつくり社会体育として発展させて行く。ただし、当面は高校と中学で活動を共にできる部分から始めていく。

②カヌーの基礎を中学生にやらせたいということについては、中学校が教員１人しかいないため、全面的に高校側の協力が必要であることがわかった。カリュキュラムをあわせることは、高校と中学はカリュキュラムの作り方が違うので難しい。独立した時間帯（例えば夏休み中など）を作らなければ不可能であることがわかった。

〔英語〕

・中学の先生と直接お会いでき、また、中学校での授業の様子、考え方も少しはわかり良かったと思います。高校との差が大きいと思いました。
・あの会だけでは、研究課題等を見つける、確認するのは難しいです。かといって別の機会を作るのも忙しい中、難しいし…。
・英語のみを考えれば、もっと中高で考えること（教え方、何を教えるか、到達目標は何か…）があると感じました。連携は意味があるように思います。
・是非、通年自由に授業参観できるようにして欲しい。その中でお互いの状況もわかり、理解でき、新たな方向もみえるように思います。

〔国語、吉原Ｔ〕

・打ち合わせができること自体とても良い。
・今後、懇親会が持てるか。

〔赤羽Ｔ〕

・中学校側、高校側の授業の展開がなかなかわかりずらい中で、生徒の力を伸ばすのは難しいので、相互の授業交換等の中で補っていく必要がある。この点が確認できたことは良かった。
・中高で一貫した教育ができるようにするためにも、中高の先生の交流の場がもっとあっても良いのではないか。

〔体育、才口Ｔ〕

・話す機会が持てたことはとても良かったと思います。が、時間が短すぎたため、実情報告程度で具体的に内容を検討するまでいかなかったのが残念でした。
・カヌーが対象になりましたが、中学校とは授業形態が違うため、学校全体として取り組んでもらわないと難しそうです。
・教科等で実施を考えながら、やはり担当ごとの話し合いがないと先には進まないと思います。

〔芸術・富岡〕

・これまで中学に出掛けたり、教科同士で話し合ったりする機会はなく、近くの学校にいながら行き来がややもすると消極的であったと思う。昨年、交流授業を経てお互いに挨拶が交わせるようになり、また、中高一貫の研究委員として中学校に出入りし、身近に感じられるようになった。
・中学の授業でお手伝いができるものであれば、空き時間を利用して可能ではないか。
・教職員間の交流でも、スポーツ交流ばかりでなく本校の美術室を開放したい。
（ガラス工芸：１時間～５時間・手作り時計：５～１０時間など）
・中学は年間の活動が４月にビッシリ決定され、中高の合同会議どころではない。この会を新学期の始まる４月当初に、顔合わせ程度でも慣例として位置づけしたらどうか。
・空き時間や放課後に教科間で気軽に行き来ができると良い。
・犀峡の職員体制も大変だが、さらに中学の大変さが理解できた。
・将来的には、幼・小・中・高の連絡会に広げて行かないと地域の教育活動や意味付けが一本化できない。
・広く共通の立場で教育制度や教育問題、児童生徒が抱えている問題等を議論する必要を感ずる。

資料７
[F.NO.184]

［中高一貫教育研究］

「講演会について」

中高一貫教育研究委員会

◇日　時：８月２７日（金）　３：００～５：００
◇会　場：信州新町役場会議室
◇講　師：三重県飯南地域より
　・飯南町立飯南中学校　　竹林敏夫校長
　（飯南町立飯高西中学、飯高東中学）
　・三重県立飯南高等学校　荒井順治教頭・宇田克巳教頭

◇内　容：①中高一貫教育（◎連携型）の決定及び実施までの経緯について
　・そこに至るまでの中学側、高校側双方の具体的な話し合いや準備、克服すべき問題点等
　・４校教職員の相互理解や話し合い(連携の内容等の会議や打ち合わせ)の持ち方について
　②飯南地域の特性と実情、連携中学と飯南高校の学校及び生徒の実態と特徴について
　・飯南地域の中学生とその親の進路意識（飯南高校に進学する思い）について
　・中高一貫教育に対する中学校の保護者や地域社会、住民の理解と協力、期待感は。
　・連携中学から飯南高校に入学する割合と飯南高校卒業生の進路状況は。
　・過疎、少子化の実態や遠距離通学者（松坂等への進学者も含め）の交通手段は。
　・三重県における中高一貫教育の目的と内容、設置形態は。
　・　〃　及び飯南地域における高校中退、不登校、いじめの実態は。

　③中学、高校の教育課程、教育内容、特色ある科目と共通科目、地域の素材を使った科目や活動、小→中→高の具体的な学習の積み重ねとその困難点について
　・中学校相互の連携や小、幼・保との連携と具体的な取り組みについて
　・クラブ活動・生徒会活動の実態（問題点）と連携の内容、成果と問題点について

　④入試の具体的な方法と内容、問題点について
　・三重県における高校入試の実態と問題点

　⑤教職員の交流と保護者・地域の反応
　・県からの人的措置（教員配置及び加配）と中高一貫に対する予算的な措置について

　⑥中高一貫教育に対する地元行政の関わり（財政及び人的措置など）と地域の教育力（社会人講師）の活用について

　⑦現在までの中高における成果（ゆとり）と今後の課題と問題点、将来への展望について

等

質疑応答・意見交換

８月２７日(金)に開催しました「講演会」の感想・意見です。《高校分》

参加者は、信州新町中(12名)・犀峡高校(16名)・町会議員(12名)・ 他校関係者(4名)
中学ＰＴＡ関係者(1名)・高校同窓会(1名)・ 議会事務局(1名)の４６名でした。

◇会　場：信州新町役場会議室（２Ｆ）
◇演　題：『連携型中高一貫教育校について』（三重県飯南地域の例）
◇講　師：竹林敏夫先生（飯南町立飯南中学校長）
　　荒井順治先生（三重県立飯南高等学校教頭）
　　宇田克己先生（　　〃　　）

◇次　第：『講演会』　　司会・進行：成田(信州新町中)

１．開会のことば	成田
２．主催者代表挨拶（講師紹介）	小林信州新町中学校長
３．「講演会１」：飯南高校より	荒井・宇田先生
「　〃　２」：飯南中学より	竹林先生
４．質疑応答	

《休憩》

『懇談会』（講師の先生と信州新町中学、犀峡高校の先生が出席）

５．お礼のことば	宮本犀峡高校長
６．閉会のことば	富岡(犀峡高校)

《感想・意見》

・中学、高校双方の説明が聞けて、かなり飯南型の中高一貫の特徴が理解できた。総合学科を導入したメリットとデメリットが鮮明になった。
・折角の企画であったのに、種々の出張等と重なり出席者が少なかったのが残　念であった。
・高校入試の緩和を目的としたというが、現在高校入試は激化していない。非行を生み出しているというが、そのようなことは単なる主観である。現在、定員に満たない高校がこれ程あるのに、何故倍率が高く激化などというか、疑問である。
・利点に中高の教員交流を力説しておられたが、それは当初期待した意義ではなくただの副産物である。
・中高一貫より小中一貫が先だと思う。基礎的学力、社会性をそこで学び、１６才になったら学習に専門性、職業性を厳しく取り入れるべきだと思う
・犀峡高校の立場と飯南高校の立場がすごくよく似ていて驚きました。総合学科とセットで一貫教育をするというのは、なるほどと考えさせられました。
・聞いた限りでは、今すぐにでも出来そうな気がしました。総合学科の可能性を考えた方がよいかも知れません。
・三重県の中山間地区や飯南地区の将来的な展望、今後の総合学科の発展性と成否が不明瞭であり、地域高校や中高一貫教育が今後どのように位置づけられ、意義を見い出し市民権を得て発展するか未知数である。

※飯南高校の教頭２人制について、複数の先生から質問がありました。
　総合学科設置のため、教頭プラス１を置いている。

資料８

中高一貫教育研究委員会

視察・研修報告（中学校）

１．視 察 校：福井県池田町池田中学校
期　　日：８月２８日・２９日
視 察 者：田中利和・成田顕宏
視察概要：・１年数学の授業参観と懇談
・福井県立武生高等学校池田分校と連携型の実践研究を行っている。
・昨年度からの継続研究の２年目であり、通年のＴＴ形態による教員交流が行われている。
・通年での教員交流を進めるためには、学校間の日程調整や年間計画など授業以外の部分での体制づくりが小規模校においては今後重要な課題である。
・学校規模や地域の状況などが大変にており、参考になった。

２．視 察 校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校
期　　日：１１月１日・２日
視 察 者：濱　秀彦
視察概要：・教育研究会発表会への参加
・公開授業の参観と総合的な学習の構築についてのワークショップ
・地域と関わりながら学習を進めて行くための課題構築ポイントについて、具体例に沿いながら研修をすることができた。

３．視 察 校：大阪府松原市立松原第三中学校
期　　日：１１月８日・９日
視 察 者：成田顕宏
視察概要：・文部省指定進路指導研究発表会への参加
・高校授業の体験として、高校側の教師が中学校で授業を行った。（８教科９講座）
・準備もよく、生徒も意欲的に参加しており、交流授業の在り方についても参考になった。
・地域との連携を中心とした選択教科及び総合学習の公開授業
・地域の方を講師として招いたり、学校外へ活動を広げたりすることが積極的に行われており、地域との連携の在り方など大変参考になった。

資料９
[F. NO. 176]

［犀峡高校・中高一貫教育研究委員会］

1999. 8. 25

視　察　報　告（高校）

１．視察校：高知県立四万十高等学校（〒786-0301 高知県幡多郡大正町田野々590-1
☎0880-27-0034［FAX 0880-27-0477］）

２．視察日：８月１７日（火）～１９日（木）

３．視察メンバー：米倉・富岡・北沢

４．報告

◇四万十高校の概要（学校要覧より抜粋）

・沿革：S29年５月　高知県立窪川高等学校大正分校(定時制林業科)として開設。
40年４月　校名を高知県立大正高等学校と定め、独立校として発足。
第１期生(普通科48名、林業科44名)
H11年４月　校名を高知県立四万十高等学校と改称。普通科を普通コースと自然環境コースに改編。

◇教育方針

①自然や人と共鳴し、調和して生きて行くことができる感性豊かな生徒を育てる。
②情報化、国際化の社会に適切に対応し、知性的かつ創造的に生きて行くことのできる生徒を育てる。
③生徒一人ひとりの個性を尊重し、生徒自身の人格形成や将来の自己実現に向けた教育を行う。

◇教育重点目標

１．学力の向上
２．人権・同和教育の推進
３．生徒指導の徹底
４．生徒会活動の育成
５．進路指導の徹底
６．中高連携教育の推進※
７．社会福祉活動の推進
８．開かれた学校作りの推進

※学校、地域ぐるみの中・高６年間を通した連携教育の推進により、学校、地域の活性化に加え、開かれた学校づくりに努める。

◇学校運営機構及び校務分掌

校長 ― 教頭
- 職員会議
- 企画委員会

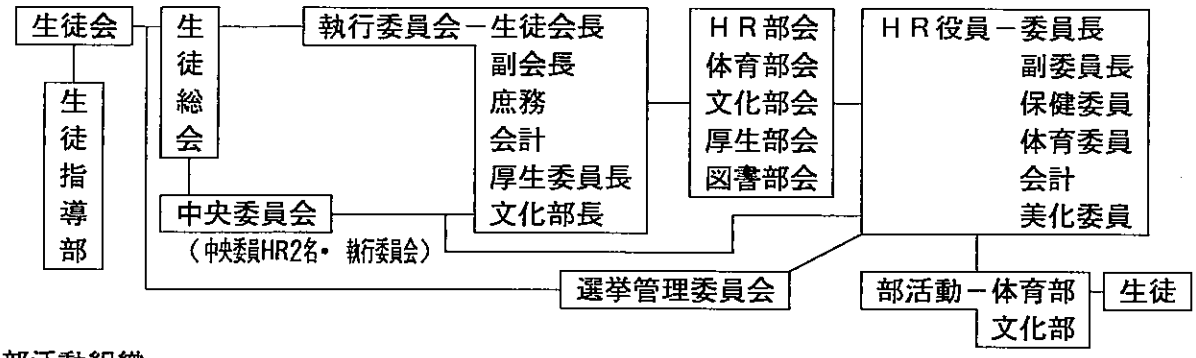
- 総　務　部（４名）…総括、渉外広報、PTA、同窓会、学校通信、行事他
- 教　務　部（６名）
- 生徒指導部（６名）
- 進路指導部（４名）
- 図　書　部（１名）
- 人権・同和教育部（２名）
- 企画委員会（教頭・事務長他７名）
- 同和教育推進委員会（　〃　他５名）
- 学校保健安全委員会（　〃　他２名）
- ボランティア推進委員会（　〃　他７名）
- 教育課程検討委員会（　〃　他１０名）
- 県外生受入れ対策委員会（　〃　他３名）
- 情報教育プロジェクト（５名）
- 教育相談　〃（７名）
- 尾瀬高校姉妹校　〃（５名）

◇教職員組織

校長１名(柴田　清)
教頭１名(野町　均)
国語２名(1名書道兼務)
社会　〃
数学　〃
理科３名
体育２名
英語３名
農業２名(1名実助)
養護１名　17名
期間講師２名(理・英)
時間講師６名(社・美茶道　四万十概論2・森と川と海)
ALT　１名
事務２名（事務長・主事）
校用技師１名
臨職１名

◇特別教育活動の組織と運営

(1)特別活動の組織



(2)部活動組織

		顧問	部員数
文化部	放送	1	4
	美術	1	4
	天文	1	8
	緑葉	1	11
	情報	1	10
			37

		顧問	部員数
体育部	ソフトボール	3	27
	バレーボール	2	23
	サッカーボール	2	15
	柔　道	1	3
	卓　球（男）	2	4
	〃　（女）	2	8
	バスケット（男）	2	29
	〃　（女）	2	14
			123

※平成１０年度高知県大会（秋、冬季大会）で男子ソフト、女子バレー第３位の成績。

◇教育課程表（別紙）

◇学科別生徒数

	学年	1年			2年			3年			計			9年度卒			10年度卒		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
普通科	1	16	22	38	12	11	23	10	11	21	38	44	82	29	33	62	27	21	48
	2	20	13	33	20	14	34	19	13	32	59	40	99						
計		36	35	71	32	25	57	29	24	53	97	84	181						

◇出身中学校別生徒数　☆連携中学校

市町村	中学校名	1年	2年	3年	計
大正町	☆大　正	22	21	18	61
	☆大奈路	5	3	8	16
	☆北ノ川	5	1	3	9
十和村	☆十　川	17	16	10	43
	☆昭　和	7	12	11	30
西土佐村	西土佐	1	3	1	5
佐賀町	佐　賀		1		1
窪川町	窪　川	1			1
中村市	東中筋	1			1
	片　魚	1			1
土佐清水市	下川口	1			1
県外		10	2		12

◇通学状況

項　目	1年	2年	3年	計
徒　歩	27	17	15	59
自転車	13	5	3	21
汽車(私線)	4	7	4	15
汽車・自転車	19	14	11	44
汽車・バイク		8	5	13
バ　ス	5			5
バス・自転車		1		1
バイク		5	11	16
自家用車	3		4	7
自　宅	61	55	51	167
下　宿	10		2	12
親　族		2		2

◇進路

	卒業者	大学等	専修学校	就職者	その他
男	27	4	8	13	2
女	21	※4(1)	9	6	2
計	48	8	17	19	4
%	100	16.7	35.4	39.6	8.3

※公立県内大学へ女子１名（短大へ１名）

◇コースの特徴

○普通コース（定員４０名）

数学、英語等の普通科目を中心に大学進学に向けたコース。商業に関する科目も選択履修できるので、進学から就職まで様々な進路希望に対応できる。

特色のある科目：「四万十概論」「英語一般」「簿記」「情報処理」など

○自然環境コース（定員４０名）

四万十川の自然やふるさとの文化を中心に「人と自然に優しい」人間を育てる。自然や環境に関する知識や技術を体験的に養い、見て聞いて考えて行動できる人間を育てます。

特色のある科目：「四万十概論」「自然体験」「観察・測定」「環境学概論」「郷土料理」「環境農業」など

◇教育課程

教育課程（案）

コース	普通コース					自然環境コース					
学年	1年	2年		3年		1年	2年		3年		
専攻		文理	情報	文理	情報		自然体験	環境科学	自然体験		環境科学
				文 ⋮ 理					男子	女子	
1	国語Ⅰ（4）	国語Ⅱ（4）		現代文（4）		国語Ⅰ（4）	国語Ⅱ（4）		現代文（4）		
2											
3											
4											
5	地理A（2）	世界史B（4）		日本史B（4）		地理A（2）	世界史A（2）		日本史A（2）		
6											
7	倫理（2）					倫理（2）	数学Ⅱ（3）		政治経済（2）		
8											
9	数学Ⅰ（5）	数学Ⅱ（3）		政治経済（2）		数学Ⅰ（4）			数学A（2）	数学B（2）	
10							化学IB（2）				
11				数学Ⅲ（3）					生物Ⅱ（2）		
12		化学IB（2）					生物IB（2）				
13						化学IB（2）			体育（3）		
14	化学IB（2）	生物IB（2）		生物Ⅱ（2）			体育（3）				
15						生物IB（2）					
16	生物IB（2）	体育（3）		体育（3）					オーラルコミュニケーションA（3）		
17						体育（3）	保健（1）				
18	体育（3）						音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰ（1）				
19		保健（1）		オーラルコミュニケーションA（2）			英語Ⅱ（3）		家庭一般（2）		
20		音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰ（1）				保健（1）					
21	保健（1）	英語Ⅱ（3）		リーディング（3）		音楽1 美術1 書道1（2）			環境科学（2）		
22	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ（2）						家庭一般（2）				
23						英語Ⅰ（4）			自然体験（2）	環境情報処理（2）	
24	英語Ⅰ（5）	家庭一般（2）		家庭一般（2）			生態学概論（2）				
25									環境農業（2）	生活環境（2）	
26		数学A（2）	情報処理（2）	古典Ⅰ（3）	化学Ⅱ（3）		環境農業（2）	環境情報処理（2）			
27					簿記（3）	四万十概論（2）			森林環境（4）	保育（2）	化学Ⅱ（2）
28		ライティング（3）	簿記（3）				森林環境（3）	地場産業（3）			
29	四万十概論（2）			英語一般（2）	物理IA（2）	森と川と海（2）		環境学概論（3）		郷土料理（2）	観察・測定（2）
30					情報処理（2）						
31	総合学習（ケクレプラン）										
32	ホームルーム活動	ホームルーム活動		ホームルーム活動		ホームルーム活動	ホームルーム活動		ホームルーム活動		
33	クラブ活動										

この教育課程は一部変更されることもあります。

◇その他の特徴

・地域外からの入学に対応…県外入学者受入対策協議会で対応し、里親制度、宿舎の確保を行っている。本年度、自然環境コースに１２名受け入れ、旅館を借り切って宿舎に使っている。
・普通コースで実施。四万十高校と中高連携教育を実施している地域の５つの中学を卒業見込みの者を対象に行う。
自然環境コースでは５つの中学校のほか、高知県内の中学を卒業見込みの生徒を対象に実施する。県外からの入学希望者は一般入試のみ。
・進学状況…過去３年間では、広島大、高知女子大、下関市立大、高知工科大、大坂電通大、四国学院大、松山大、徳島文理大、長崎総合科学大等
・学校図書館《悠々館》の地域開放…地域文化の拠点として地域へ開放し、地域のコミュニティセンターとして活動する。
・尾瀬高校との姉妹校提携…生徒会執行部の交流や自然体験学習に参加。

◎中高連携教育の推進

「土佐の教育改革」の一環で平成８年度から県の指定を受け、地域中学校と連携教育を推進している。

※高知県の「土佐の教育改革を考える会」は1996年６月24日にスタートして合計10回の会合を持ち、それを受けて県教育委員会より、1997年度の「高知県の教育行政方針」が出された。「考える会」で教員採用や管理職登用、教員研修などが公開議論され、その中から改善の方向が出されている。その中から「県独自で５年間に３００人の教員増」、学校ごとの「開かれた学校づくり推進委員会」や市町村毎の「地域教育推進協議会」の設置が決められ、これらが全国的に注目される。
『中高連携事業』は、「考える会」を受けて教育委員会が具体的な施策として始める。この事業の元々の狙いは「過疎対策」であり、若者の地元定着と小規模校の活性化が目的と思われる。「考える会」より少し前に、６年間の地域指定として３校で始まった。97年は教育改革の流れにも位置づけられ、さらに３校が追加された。地元からの進学希望者がやや増加傾向にあるが、まだ取り組みが始まったばかりで、英数を中心とした中高教員の相互乗り入れと部活動での連携等が中心で「共同で特色ある教育課程を研究・実施」したり「地域社会との連携」を深めるまでに至っていない。

１．実施高校
1996年４月から－嶺北高校、檮原高校、大正高校（→四万十高校に改名）
1997年４月から－大栃高校、中芸高校、室戸高校が追加。
1998年４月から－上記の６地域指定に変わる。

２．高知県の「中高連携教育構想」－『内外教育』(1995.9.19日)より
「教育における中山間地域対策」として県立高校と地域の複数の中学校を指定し、学力向上や地域の特色を生かした教育などを目指す。

(1)基本方針
①共同で特色ある教育課程を研究、実施。
②学力の向上、基礎学力の定着のため中高連携による習熟度別学習。
③部活動での連携、指導者の交流。
④専門知識を持った社会人の積極的活用など地域社会との連携。

(2)具体策
①数学や英語などで進度の早い中学生には高校の教師が指導し、遅い高校生には中学の教師が教え直し、基礎学力の定着を目指す。
②郡部の中学校で担当教諭の少ない技術・家庭や美術などの教科指導に高校の教諭が当たるなど、免許外教員の問題の改善を図る。
③森林や林業などと関連が深い教科を６年間通して学習したり、例えば四万十川について自然・歴史・ 風土などを系統的に学習するなど、地域特性を生かした教育課程が実践できる。
④現行では実施されていない「普通科の推薦入学」についても、一定の枠を設ける。

(3)教育長の話
「私立のような中高一貫教育の学校を新たにつくるのではなく、県の現実に即したより柔軟な『連携』を進めていきたい。」

(4)ねらい
①若者の定着　②小規模校の活性化
（高知西高校 柿内芳治氏「高知県の中高連携教育」1998.12.4 レジュメより抜粋）

その主なねらいは、

①地域性との学力の向上
②郷土学習を中心にした郷土愛の育成
③地域中学校と高校の理解と協力関係の確立等

◆教科活動〔中学校と高校の教員相互派遣〕
・英語、数学、技術家庭等（中学校）でのティームティーチング（Ｔ・Ｔ）
・数学（高校）での習熟度別クラス編成による授業
・ベースとして配属されているＡＬＴとＴ・Ｔによる授業

◆ふるさと体験学習〔連携している地域中学校との生徒と先生の参加で郷土学習を行う〕
・四万十川の水質調査　・ふるさと文化の伝承

◆クラブ活動の交流
・地域中学校との合同練習や交流試合等を行い、競技力の向上に努める。

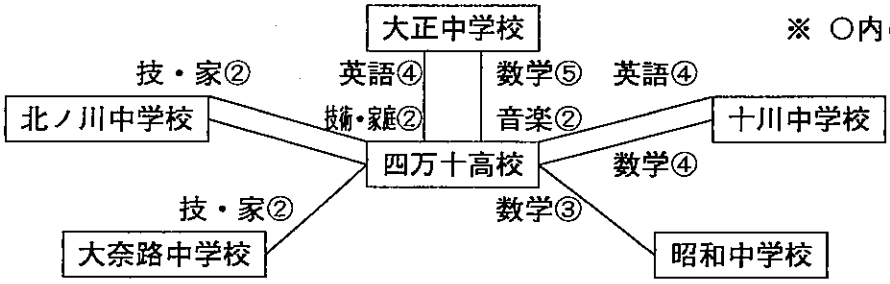
◆開かれた学校づくりの推進
・生徒が主人公であるという教育方針のもとに「ＯＰＥＮ ＨＩＧＨ ＳＣＨＯＯＬ 大正」（大正高校を語る会）
生徒代表８名、地域代表５名、学校代表５名等で構成する組織があり、生徒や地域の声を学校運営に反映させる。

《平成11年度授業計画書(案)より》

◎県教育委員会経費で対応する事業

(1)授業における教員の相互交流

年間	四万十高校から大正中学校へ	週４時間	英語
〃	〃　十川中学校へ	〃	〃
〃	大正中学校から四万十高校へ	週５時間	数学
〃	十川中学校　〃	週４時間	〃
〃	四万十高校から昭和中学校へ	週３時間	〃
１学期	〃　北ノ川中学校へ	週２時間	技術・家庭(情報処理)
３学期	〃　大奈路中学校へ	週２時間	技術・家庭(情報処理)
年間	大正中学校から四万十高校へ	週３時間	音楽
前期	四万十高校から大正中学校へ	週２時間	技術・家庭



(2)公開授業
国語、社会、理科、保健体育、英語、数学、技術・家庭、音楽の８教科を対象に、各校１回実施。

(3)教科担当者会

(4)こころの健康教育　年３回
四万十高校から大正・大奈路・北ノ川・昭和・十川の５中学校へ
（保健体育、養護教員）

◎推進協議会の経費で対応する事業

〔１〕補助対策事業

１　ふるさと教育

(1)四万十の自然、環境、歴史、文化の調査・研究

①ふるさと探検隊（地元１回、遠征２回）

「ＤＩＳＣＯＶＥＲ　四万十　ふるさと探検隊」（夏季　上流、源流域）

第１日目　事前学習

第２日目　実地調査（遠征）と体験学習

第３日目　事後学習

「ふるさと探検隊」　（秋季　中流域）

各校で採水し、結果をテレビ会議等で報告・考察

「ＦＯＲＥＶＥＲ　四万十　ふるさと探検隊」（冬季　下流域）

実地調査（遠征）と体験学習

②ふるさと文化の伝承

郷土料理の伝承を目的に、アユ等の食材を用いた郷土色の豊かな料理についての調理法を学び試食する。

２　国際理解教育の推進

(1)英語暗唱弁論大会

３　情報教育の推進

(1)パソコン講座…中高生及び地域住民を対象にパソコン基本講座を開講

４　部活動における連携

(1)スポーツ交流大会（ソフトボール、バレーボール、卓球）

(2)指導者講習会　（ソフトボール、バレーボール、卓球）

５　その他

(1)「ジャズコンサート」の鑑賞会

〔２〕その他の事業

１　中高連携教育推進協議会及び推進行動委員会の活動

(1)推進協議会の開催

(2)行動委員会等の開催

２　その他

(1)事務補助員の確保

(2)その他　高校の姉妹校の連携支援

◎収支予算

収入の部

科　目	予　算　額	説　　明
県費補助金	１，３００，０００円	高知県中高連携教育推進事業補助金
町村負担金	２，４００，０００円	大正町・十和村負担金
雑収入	１，０００円	預金利子他
合　計	３，７０１，０００円	

支出の部

補助対策経費：報償費(694,000円)・旅費(178,182円)・需要費(730,000円)・役務費(50,000円)(2,612,182円) 使用料・賃借料(960,000円)

その他の経費：賃金(462,000円)・旅費(227,490円)・需要費(349,328円)・役務費(50,000円)(1,088,818円)

「学校案内」中のＣＦ
表紙…“森と水の国に育つグローバルな視野と感性”
中刷…“清流四万十から全国へ発信”　“地域に根ざした教育”
“清流に学び　清流に遊ぶる青春！”

◇四万十高校　野町　　均教頭先生(この４月赴任)との懇談メモより

・過疎化で存続の危機にあった。かつては、１学級（分校、定時制）で廃校の危機。
・自然環境を生かした学校づくり
・群馬尾瀬高校の自然環境学科を参考にした。
・普通科で、現在の在校生が１８１名。１年７１名。自然環境コースに地域外から１２名入学（県外より１０名、県内２名）
・中山間地域の振興。知事部局（行政）でも議論されていた。
・橋本県政の『土佐の教育改革』の影響が強い。
・学校、家庭、地域の連携。開かれた学校づくり。このことについては、年に３～４回議論。
◎中高の連携（前出の事業報告書参照）
・授業における教員の相互交流
…互いに手薄な科目を補う。相互の学校、生徒を知る。
・県内の６地域を指定。四万十高校は授業連携、四万十川の水質検査
・本年度、嶺北地域が中高一貫教育の県の指定を受け、研究委員会が立ち上がる。
・中高連携教育の研究　自然環境教育
情報教育　┐ 何ができるのか。
・現在、事務局（中高連携教育推進協議会）は大正町教育委員会にある。
・音楽鑑賞の合同実施による交流
・クラブ交流　ソフトボールは伝統的に強い。
・「四万十概論」１年２単位→総合学習へ移行したい。
・総合学習（ケクレプラン）　１単位
内容：環境法規、伝統芸能、自然観察、陶芸、花の栽培。来年は文学、絵画など。
→土曜日の２時間を当てたい。
・高校での持ち時間は、１５、６時間。中学は２０からもう少し多いか。
・生徒の学力差は大きい。ＴＴや補習で対応している。
窪川高校の定時制があるが、地元の高校で引き受けたい。
・都市部よりの生徒の逆流はほとんど無い。生活指導面は大変でない。
・通学手段は…鉄道（予土線）が通っている。
・地元生の２／３は地区外へ出てしまう。７０％はほしい。
高知の私学、職業高校へ抜ける。大学進学
・県外生の住まいは、旅館を寄宿舎に改造して使っている（男３名・女４名）。
あとは下宿生、アパート、里親（１名）
・分校からスタートしたため、地域住民や行政の理解、協力や関わりは強い。
・学力検査の実態…推薦と一般入試。

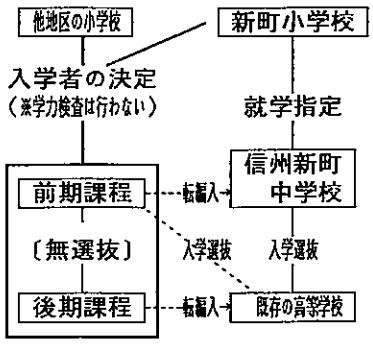
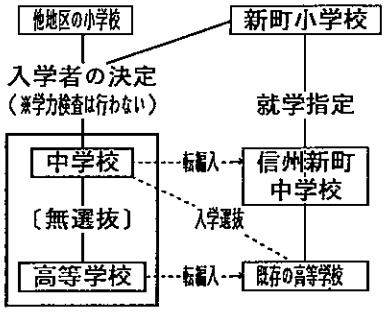
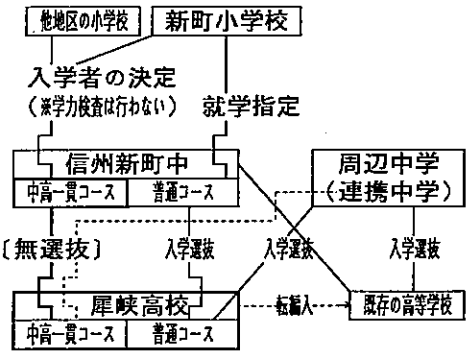
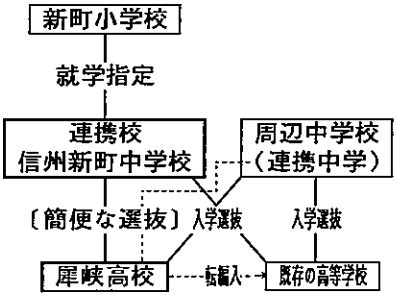
◇校舎見学
・校内はきれいに整理、清掃され、廊下等にゴミは見当たらない。トイレもきれい。
・自転車置き場に自然観察、校外学習用の自転車約５０台が設置されていた。
・情報処理室では既にパソコンが４０台設置され、そのうちの何台かは研究室で使用している。これは、橋本県政の施策も反映されていると言う。
・美術室が小さく、手狭でびっくりした。

資料10

信州新町における中高一貫教育の形態別のシミュレーションと特徴について

（既存の犀峡高校を再編して中高一貫校にした場合を想定して）

［F.中高一貫 NO.106］

形態	概念図	課題・問題点
新設型の中等教育学校		①信州新町地区内の少数(70→50人、10年後は40人）の中学生を２つの学校で分け合うこととなり、一層小人数学校となる。 また、学校としての活力がなくなり教育活動に支障が出たり、狭い地域での対立意識が生まれる。 ②信州新町中学以外の周辺の中学から後期課程への入学が困難になり、地域に高校が１校しかないため、地域の中学生が進学する高校がなくなる。 ③全県から募集も考えられるが、寄宿舎が必要になったりその他の施設・設備に多額の建設経費や費用が必要となる。 地域を限定して生徒を募集した場合、地元の中学校が小人数校となり、統廃合が懸念される。 ④仮に、中等教育学校に全員入学することとした場合、保護者や地域住民の理解が得られない。 ⑤発足までに学校運営や教育内容等の検討に時間がかかる。
併設型中学校・高等学校		上記と同じ。
準併設型中学校・高等学校		①信州新町中学内に２つのコースが存在し、上位生が中高一貫コースに集中すると進学コースとなり、マイナス要素の２極化がが生ずる。 ②進路選択の早期化が懸念され、進路変更も予想される。 ③教育内容、教育課程が複雑となり教員定数の大幅な増が必要となる。 ④犀峡高校の中高一貫コースとの綿密な連携が必要。 ⑤単独で単一のクラスが中学から高校へ進級し、集団が固定化される。 ⑥諸課題を克復し、地域や保護者に認知されるまでに時間がかかる。
連携型中学校・高等学校		①交流授業が以前より継続して行われていたり、教員・生徒の交流の実績は作られつつあるが、６年を一貫した教育課程の連携など課題は多い。 ②地域の少子化により、入学者数の増加は望めない。 ③犀峡高校の進学や資格取得の実績が弱く、また、保護者や生徒の都市部志向が強いため、地元住民の共通理解が得にくい。 ④学級減の移行期であり、厳しい教育環境・教育条件にある。 ⑤中高双方とも教員の数や加配の有無により、連携の内容や教育課程等に大きく影響する。また、教員同士の調整も必要である。 ⑥地元住民や保護者(児童生徒)、中高教職員の新しい学校づくりを目指した意識改革が必要である。 ⑦連携型の中高一貫教育には中高双方の年間を通じた調整が必要であり、準備期間と調整のための機関が必要となる。

考　　察	備　　考
・困難点や課題が多く、設置は難しい。	資料：F. 170
・既存の犀峡高校の施設(教室)を使って、中学１クラス、高校２クラス募集で可能だが、課題が多く、設置は難しい。	
・中高の同一学校内に異なった学校（コース）が存在し、多くの困難が予想され、設置は難しい。	
・４月以来、県より研究実践の指定を受け様々な視点より検討を重ねて来たが、実施には条件整備が必要であり、中高一貫を目的とし中高の学校変革（教育課程・教育内容・行事変更等）や教職員の意識改革に時間とさらなる研究が必要であり、乗り越えなけならない課題も多い。 ・中高一貫教育には時間的な制約もあって検討課題は多いが、連携教育(授業)を中心とした学校連携については実績もあり、今後の取り組みや教育条件整備によっては、他地区の地域教育や地域高校の在り方にも示唆を与えるものと考える。	

［中高一貫教育研究資料］

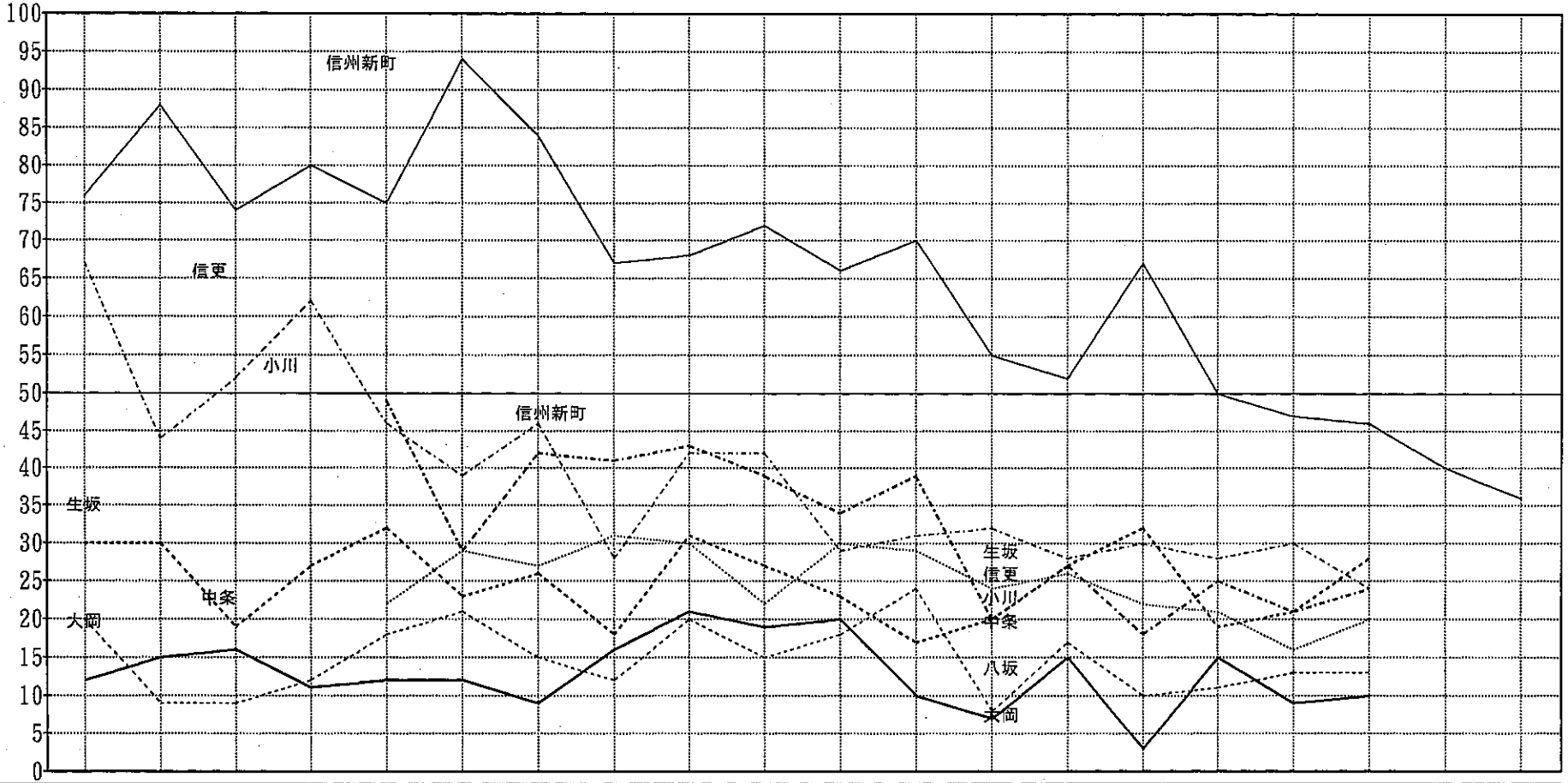
近隣市町村の児童・生徒数の推移

（平成10年度長野県教育要覧参照） 1999.9.21

《１９９１年（平成３年）～２００８年（平成２０年）》

［F.中高一貫 NO.170 P.1］

（単位名：人）



	1991	1992	1993	1994	1995	1996	97(高3)	98(高2)	99(高1)	00(中3)	01(中2)	02(中1)	03(小6)	04(小5)	05(小4)	06(小3)	02(小2)	08(小1)	2009	2010
―信州新町	76	88	74	80	75	94	84	67	68	72	66	70	55	52	67	50	47	46	40	36
―大岡	12	15	16	11	12	12	9	16	21	19	20	10	7	15	3	15	9	10		
----八坂	20	9	9	12	18	21	15	12	20	15	18	24	8	17	10	11	13	13		
----生坂	30	30	19	27	32	23	26	18	31	27	23	17	20	27	32	19	21	28		
----信更	67	44	52	62	46	39	46	28	42	42	29	31	32	28	30	28	30	24		
----小川					49	29	42	41	43	39	34	39	20	27	18	25	21	24		
----中条					22	29	27	31	30	22	30	29	24	26	22	21	16	20		

資料11

《信州新町地区における緩やかな連携型の中高一貫教育（「中高連携教育」）の提言》

信州新町をはじめ、西山・犀川流域地区全体の高齢化と過疎化が一層進行し、少子化に伴って地域全体の学童児童・生徒も減少傾向が続く信州新町地区にあって、信州新町中、犀峡高校とも生徒数の減少が将来にわたって続くものと考えられ、また、犀峡高校は長年にわたって定員に満たない状況が続き、１学年２学級規模の小規模化も予想されている。そして、中高とも授業やクラブ活動、学校行事等で小人数の活動が余儀なくされ、効果的な教育活動が困難な場面も生じている。

さて、長野県下の多くの中山間地域の中高を取り巻く教育事情も同様であり、このような地域にある幼保小を含め中高の教育活動を連続させ連携を強化した新しい教育システムの確立は、地域全体の活性化や発展、若者の定着に多大の影響を与えるものと思われる。

そして、このことは過疎化の進む長野県の中山間地における教育の今後の在り方にも一つの示唆と方向を与えるものと考える。また、地域高校に対する当該校の生徒・教職員やＰＴＡ・同窓会はもとより地元住民や教育関係者の期待は大きく、加えて地域経済をも左右することから行政関係者や地元町村議員らの関心は高く、支援も多大である。

今後、長野県の地域教育（学校５日制や生涯学習への対応を含む）や地域振興、過疎対策をどのようにするかの観点に立って考えた場合、地域全体の教育力の維持、発展が不可欠であり、学校間の連携を中心にした教育活動と教育行政を巻き込んだ地域教育網の整備が必要であろう。特に、広く長く地域教育の核となり、教育の場を維持・提供しながら地域に貢献できる人材の育成や教育・文化の発展向上に寄与してきた中学、高校の存在意義は大きく、地域に根ざした学校教育の推進と中高の連携による教育の活性化、新しい教育システムの構築が早急に求められている。

具体的には、犀峡高校（校内に事務局を設置）を中核にしながら、

①信州新町中学や周辺市町村の中学とのＴＴと習熟度別クラス編成によるに学習指導をを中心とした連携教育（交流授業、派遣授業、出張授業、中学生が高校の施設・設備を利用しての授業や体験学習など）の展開をメインにして、

②地域の特徴や特性を生かし、地域や郷土を中心テーマとした「郷土学習」や「総合的な学習」（小中高の新教育課程への対応）の研究と連携、教材研究、地域の教育力（社会人講師や公立の施設・設備、自然環境、犀川など）の活用と発掘

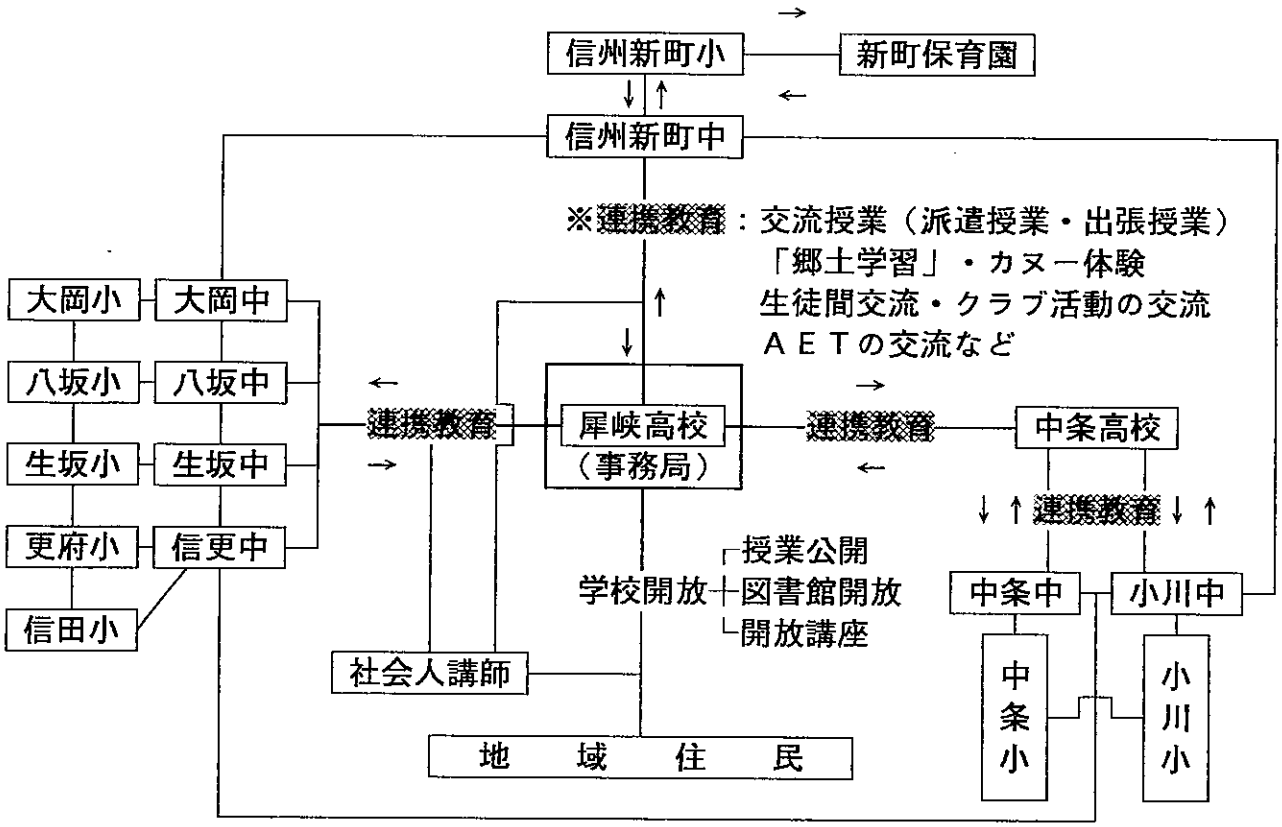
③生徒会活動（リーダー研修会や合同文化祭など）やボランティア活動の合同実施やクラブ活動の連携

④学校行事の合同開催（音楽鑑賞や芸術鑑賞、スキー教室など）

⑤最新情報機器を使ったテレビ会議やＴＶ講座、情報の収集と発信。

等を研究・実践し、また、学校週５日制を念頭に置きながら学校の施設・設備・教員の教育力を広く地域や地域住民（児童生徒も含む）に開放しながら、地域のカルチャーセンター（生涯学習センター）や教育センター的な役割を担うことも期待できる。

中高連携教育シミュレーション（犀川流域地区教育構想）



※おもな連携教育：

①基礎学力の定着と学力の向上を重点に、基礎・基本の学習が重視され、中高ででの学力差が顕著な国語・数学・英語を中高双方の教員を派遣して習熟度別クラス編成による授業で展開したり、特色ある教科・科目〔郷土や地域をテーマにした「郷土学習」（郷土の自然・歴史・芸術文化・産業・伝統芸能・郷土料理など）や犀川を利用した体育での「カヌー」の授業〕や体育・芸術・技術家庭・情報等の実技教科で、通年又は期間限定のチーム・ティーチング（ＴＴ）による学習指導を行う。また、選択科目の拡充とＡＥＴによる交流授業の実施。

②生徒会活動、クラブ活動での生徒同士の交流や合同練習、クラブ指導者の相互派遣。

〔条件として〕

- 連携教育により中高の教職員がより多忙にならないように配慮し、中高双方に教員定数以外に連携教育に携わる専門教員を相当数配置する。
- 地域を知り、中高の教育内容についてある程度理解した教員が望ましい。
- 犀峡高校内に地域全体の連携教育の研究や運営・調整を行う専門機関（地域教育センター）を置きながら、徐々に連携教育の拡充を図る。
- ＴＴのための中高担当教員の打ち合わせ時間の確保とゆとりある時間割。
- 犀峡高校に出向いての学習体験の場合の交通手段(マイクロバス)の確保。
- 地域の教育素材の発掘と研究、教育力(社会人講師)の確保と手当の補充。
- 関係の教職員やＰＴＡ、地域及び地域住民の中高連携の意識の高揚と教育による地域の活性化の共通理解と支援と援助。地域の教職員として地域の子どもたちを地域で育てようという責任感と情熱。
- 各学校間を結ぶ情報機器の設置と情報教育環境の充実。
- 県及び市町村行政の理解と人的、財政援助。

広報信州新町　1999(平成11年)9.1

中高一貫教育研究が行われています

平成11年に、県から「中高一貫教育実践研究協力校」に、信州新町中学校と犀峡高校が指定され、4月から「中高一貫教育研究」の取り組みが行われています。8月23日、役場で議会・教育委員会、小・中・高PTA関係者などで懇談会が行われました。

▼中高一貫教育についての講演会

「中高一貫教育研究」の背景

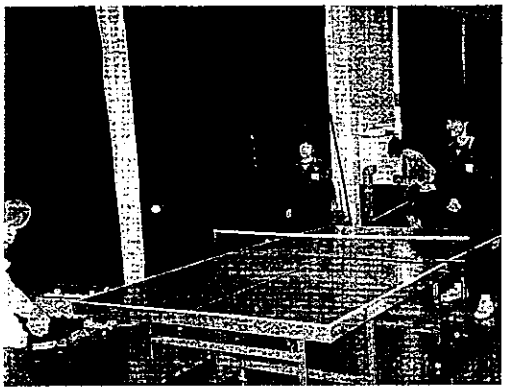
現在、ほとんどの生徒が高等学校へ進学する中で、それにふさわしい中等教育の在り方が課題とされています。これまでも総合学科の設置など特色ある高校づくりといった、高等学校側での取り組みがなされてきました。

それにとどまらず、中学校から高校までの6年間を通じて、計画的・継続的な教育指導を行い、ゆとりある学校生活で、より生徒の個性や創造性を伸ばす必要があるとして、中高一貫教育の検討が始まりました。

県下で3地区が指定された実践研究協力校

平成9年6月、中央教育審議会の第二次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」が出され、中高一貫教育について提言されました。

これを受けて、県教育委員会は、県内に公立中高一貫教育校は必要か、必要ならばどのような学校か等を検討するため、中高一貫教育研究会議を設置し、実践研究協力校として、「信州新町中・犀峡高」、「軽井沢中・軽井沢高」、「大町仁科台中・大町高」の3地区を指定しました。



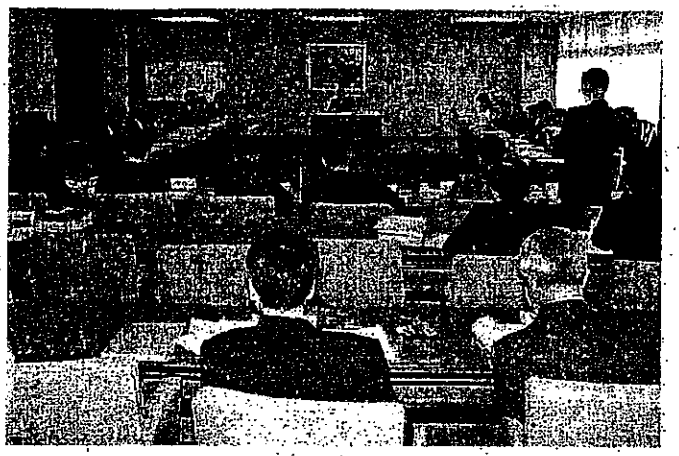
▲中学生の犀峡高校でのクラブ体験入部などが試みられている

地域の特色をいかした中高一貫教育研究

中高一貫教育の実践形態は様々ですが、信州新町中学校と犀峡高校の場合は「地域における中高一貫教育」を研究課題として、両校の先生による研究委員会が設置されました。

研究委員会では、地域の特色を生かした中学校と高等学校の連携など、中高一貫教育についての課題や問題点について具体的な検討を行い、年度内に、まとめを県教育委員会に報告する予定です。

信濃毎日新聞　1999年（平成11年）1月11日（月曜日）



文部省が導入方針

公立中高一貫校

多角的に考えよう

県教委の研究会議 検討スタート

県内に公立中高一貫校は必要か、必要ならばどのような学校か―。県教委は昨年十一月、一貫教育について考える「県中高一貫教育研究会議」を発足させ、検討を始めた。中央教育審議会の答申に基づいて文部省が導入方針を打ち出したのを受けた対応だ。これまでの論議では、一貫教育の一般的な利点や問題点だけでなく、長野県の持つ特徴や課題とどう関連付けるのかが焦点になりつつある。

研究会議のメンバーは小中高校の校長、市町村教委、PTA、県経営者協会、臨床心理士ら学識経験者など二十人。信濃教育会や教職員組合の代表も加えて「いろいろな角度からさっくばらんに検討してもらう」（高校教育課）としている。

中央教育審議会や文部省が一貫教育導入の狙いとして挙げているのは、高校進学時に学力試験がなく、ゆとりある学校生活で個性や創造性を伸ばすこと。いま全国にある中高一貫校はほとんどが私立で、高い大学進学率やスポーツの好成績をアピールする。今回は公立校の選択肢を増やす趣旨で「受験校はつくらない」ことが特徴になっている。

研究会議では、「ゆとり」については多くの委員が肯定的だが、学校選択が中学入学段階に早まることで「子ども自身の選択よりも親の意志が強く出やすい」「受験競争の早期化や激化につながらないか」などの懸念も出た。

一貫教育の利点や課題について話し合いを始めた県中高一貫教育研究会議＝昨年12月、県庁で

「受験校つくらない」前提　「ゆとり」論議

現役の大学進学率が全国に比べ低いことなど、県内の「学力問題」と絡めて論じる意見も目立つ。「問題なのは子どもたちの基礎学力低下。一貫教育が学力向上につながるのではないか」と県高校PTA連合会の委員。半面「生徒が求めているのは希望する大学への進学。中高一貫でゆとりを目指すのは大事だが、学力アップにはむしろつながりにくいのでは」（信濃教育会の委員）との指摘もあった。

ほかにも、「他県に比べて多い不登校や高校中退者への対応策として中高一貫教育を生かす方法はないか」など、さまざまな長野県の特徴と関連付けた論議も多い。

県教委は来年度から、県内にも実践研究協力校を設け、研究会議と平行して論議を深める方針だ。この協力校については「地域高校の活性化を狙って、郡部に設けるべきだ」との意見が相次いだ。

一方、志願倍率が高い都市部の高校を指定して受験戦争緩和を研究すべきとの意見や、職業科や専門学科の特色を生かす形がいいとの提案もある。これらを受けて県教委は「三種類の意見に沿った協力校の複数案を二月に開く会議に提案したい」としている。

中高一貫校の設置について県教委は、「今は白紙」として、まだ基本的な考えを示していない。教育関係者の間では「県内の実情を踏まえれば、ゆとりや高校の特色づくりなら必ずしも一貫教育でなくてよい」といった、消極的意見も目立つ。現行通学区との兼ね合いなど現場の混乱を心配する声もある。

研究会議の委員からは、「一貫校だけでなく中高間の連携全般が課題だ」「学校の設置形態よりも何をどう教えるかが大事」など、より基本的な論議を求める声も少なくない。一貫校設置の是非にとどまらず、将来の長野県教育を見据えた、さまざまな観点からの論議が必要になりそうだ。

中高一貫校の設置形態

中等教育学校	前期課程（3年）	後期課程（3年）	
併設型	中学校 →	高　校	入試なし
連携型	中学校 →	高　校	簡単な選抜

新年度 協力校指定 基本論議求める声も

【公立中高一貫校】　昨年の学校教育法改正で、既存の公立中学校の教育課程を前期、公立高校を後期とする六年制の「中等教育学校」を設置できるようになった。学校設置者が同じで無試験で接続する併設型、既存の学校を試験以外の「簡単な選抜法」でつなぐ連携型も可能だ。いずれも入学者の決定に際して、学力試験は行わないことを定めており、「いわゆる『受験エリート校』化することはあってはならない」（文部省）としている。

中高一貫校の導入を求めた九七年六月の中教審答申では、その特徴づけの参考として七タイプを例示している。それによると、①ボランティアや勤労など体験学習重視②地域の歴史や文化を学び、地域の人材育成を狙う地域学習重視③国際教育重視④情報化重視⑤環境学習重視⑥伝統文化継承の教育を重視⑦じっくり学びたい子どもの希望にこたえる。

利点では、長期に計画的に教えることで効果的な教育ができる、生徒を継続的に把握して個性や才能を伸ばせる、幅広い異年齢集団で社会性や人間性が育める―など。逆に長期間同じメンバーで固定することで環境になじめない生徒が出る可能性がある、小学校卒業時に進路選択は困難、などが問題点として上がっている。

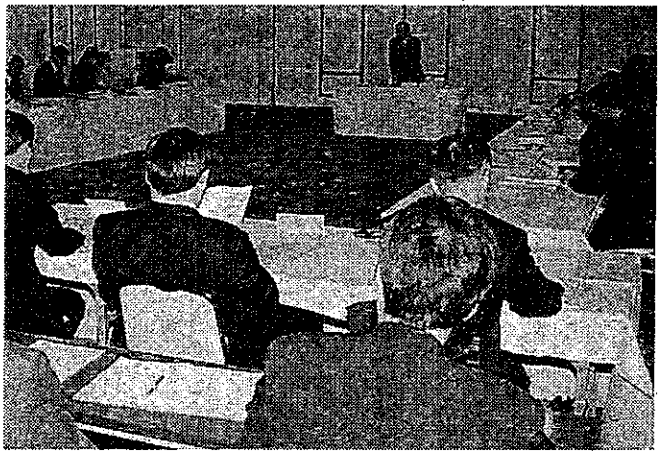
文部省は今年度から各都道府県で研究会議を設置し、実践研究協力校を設けて、検討を始めるように指示している。県教委によると、十一月現在で二十八の都道県と一市が百三十九校の協力校を指定している。

信　濃　　1999年（平成１１年）2月11日（木曜日）

中高一貫教育 6校を指定

研究協力 合同部活動など想定

信州新町中―犀峡高
軽井沢中―軽井沢高
仁科台中―大町高



６校の実践研究協力校指定を了承した
県中高一貫教育研究会議―長野市内

県教委は十日、公立の中高一貫教育の是非やあり方を研究する「実践研究協力校」として、上水内郡信州新町の信州新町中・犀峡高、北佐久郡軽井沢町の軽井沢中・軽井沢高、大町市の仁科台中・大町高―の三組六校を、県中高一貫教育研究会議（議長・漆戸邦夫信大教育学部長、二十人）に示した。同会議も了承したため、県教委は九九年度の協力校にこの六校を指定する。

実践研究協力校について、県教委は「一貫校を設置するかどうかはまだ白紙。指定が設置に直結するわけではない」（高校教育課）と説明。それぞれの中学・高校の教職員と県教委で研究委員会をつくり、中学と高校の連携、教職員の交流、入学者決定のあり方などを検討する。具体的には、合同の部活動や同じ教科の教員を交換して授業をするといった方法が想定されている。

研究会議ではこれまで、一貫教育を▽地域校活性化に役立てる▽特色づくりに生かす▽都市部校で受験競争緩和につなげる―との三種類の意見が出ていた。協力校は、「地域」をテーマにした信州新町、国際的保養地で高校に英語科がある「特色」を持つ軽井沢町、「都市部」の大町市とした。

長野市内で開いた会議では、六校の指定についての異論は出ず、委員からは「異年齢集団での特別活動で交流を」や「小学校側や父母の意見も反映すべきだ」との提案があった。「わずか一年で研究成果が上がるのか」「現場教員が納得する形で研究を」との意見も出た。

研究会議はこの日で三回目。今年度は終了し、九九年度は協力校の校長を加え、五月から論議を続ける。

県民新聞　425号　©長野県民新聞社　1999年
担当者　平成11年 3月5日（金）
月3回発行（5・15・25日）年5,000円 送料込
発行所　〒380-0836 長野市南県町998　電話 026・227・0771　FAX 026・224・6539
長野県民新聞社

中高一貫校の研究

地元意見も聞いて

▽…中高一貫…△

真村課長　中高一貫教育の実践研究協力校の研究方法は。

戸田教育長　協力校は学校や県教委などで組織する研究委員会を設置。接続のあり方、特別活動や教職員の連携・交流等、学校や地域の実情を踏まえた実践研究を行う。

その際、地元教委はじめ関係する小中やPTAからも随時、研究テーマに対する要望を聞くなど、十分な連携の中で研究を進めていく。

中高一貫教育の実践研究は、今後の本県教育にかかわる大きな課題。地元の要望などを大切にしながら、柔軟に対応していく。

第４回　中高一貫教育研究会議（1999.5.21）

5.21 信毎

中高一貫教育 利点や課題は

県研究会議で協力校説明

県教委は二十一日、昨年十一月に発足した県中高一貫教育研究会議の四回目の会合を県庁で開いた。今年度一年間にわたって、一貫教育の可能性を探る実践研究協力校（三組六校）が研究計画を説明。想定できる教育内容や利点、課題を話し合った。

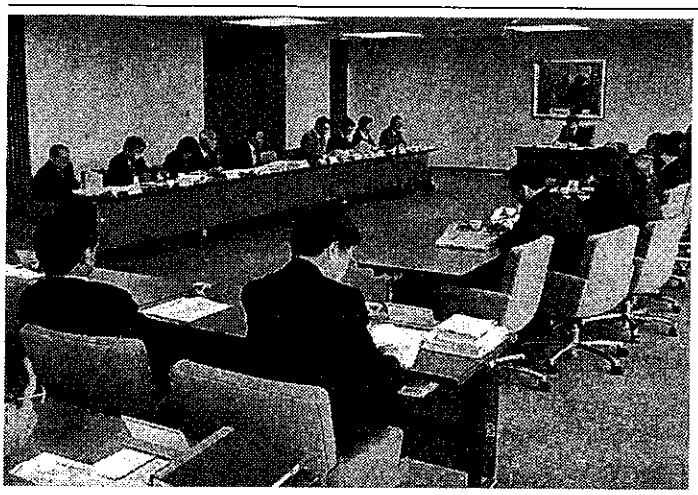
協力校は「地域の特色を生かす」をテーマにした信州新町中と犀峡高、英語や国際理解教育などを見据えた軽井沢中と軽井沢高、都市部での連携を考える大町市仁科台中と大町高―の三組。「交流キャンプやゆとりを生み出すカリキュラム研究」（軽井沢中と軽井沢高）、「公開授業と教科別研究会を年四回開く」（仁科台中と大町高）などが研究計画として示された。

犀峡高の宮本康夫校長は、中高の教員が入れ替わるこれまでの授業交換を広げたり、「郷土学習」「体験学習」を共同で行う―などの予定を説明。「一貫教育を実施することになれば、都市部への高校進学をどう保証するかの兼ね合いが問題になる」と述べた。

議論では、「ゆとり」と「進路・学力向上」が両立できるか、との懸念が出た。県高校長会長の北原明・伊那北高校長は「六年の前半は余裕を持って基礎を重視し、後半三年は多様な選択肢を用意して進路を保証すべきだ」と話した。

また、県立こども病院の降旗志郎・臨床心理士は、生徒指導にも心理学の専門性を導入することを研究するよう提案した。

空席だった研究会議議長には、信大教育学部の藤沢謙一郎学部長を選んだ。



県内の中高一貫教育について話し合った研究会議

信濃毎日新聞

第５回　中高一貫教育研究会議（1999.7.6）

中高一貫「連携型」が現実的

県教委の研究会議「併設型もメリット」

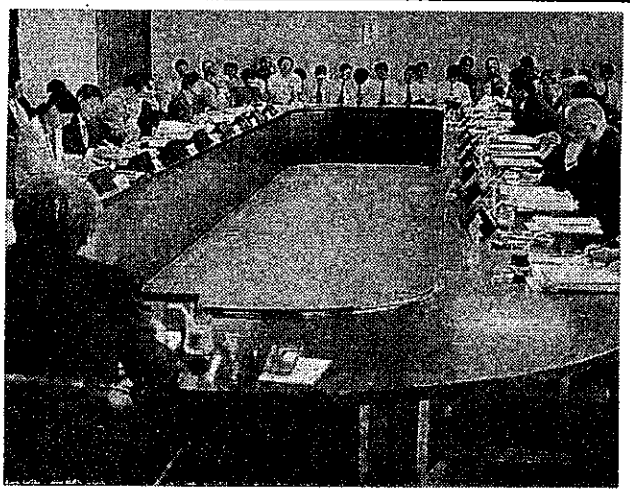
県教委の中高一貫教育研究会議（議長・藤沢謙一郎信大教育学部長）は六日、県庁で開き、県内で中高一貫教育を行う場合にどのような形態が望ましいかを論議した。既存の中学校と高校を結んで一貫教育を行う「連携型」が現実的との意見が相次いだ一方、高校入試を完全になくし、六年間を見通した教育課程を考える「併設型」などの方がメリットが大きいとの意見も出た。

中高一貫教育の形態は①一貫教育を希望する中学生が、簡易な選抜を経て高校に進む「連携型」②選抜なしで高校に進む「併設型」③六年制の中等教育学校を新たにつくる「新設型」―の三種類。連携型は、中学と高校の設置者が異なっていても可能だが、併設、新設型では設置者が同じでなければならない。

この日、学校長ら委員の論議では、ほとんどの中学は市町村が設置し、高校は県が設置している現状から、「設置者を同じにする手間が大きい」と、連携型が適当とする意見が多かった。これに対し、「学力向上を考えると、併設型で教育課程に特徴をもたせた方が効果的」（高校長）との意見も出た。

このほか、一貫教育の導入で、受験競争が中学入学段階に早まるのではないか、通学区との整合性をどう図るか、などの懸念の声が出た。

また、県教委は、全国では山梨県の甲陵高校（北巨摩郡長坂町）など公立二校と私立十一校が、二〇〇〇年度から中高一貫教育を目指していることを説明した。次回は九月に開く。



中高一貫教育の設置形態について論議した研究会議

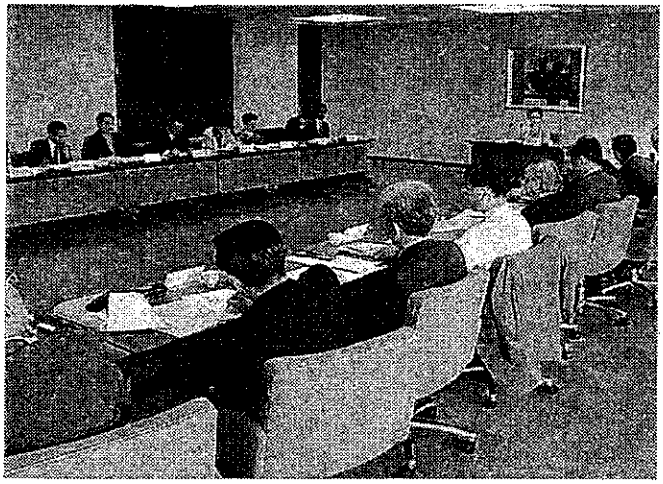
信濃毎日　1999年（平成11年）9月14日

中高一貫教育

「併設型」か6年制で

県研究会議「メリット大きい」の声

第6回　中高一貫教育研究会議（1999.9.13）



一貫教育について論議した県中高一貫教育研究会議

公立の中高一貫教育を検討する県中高一貫教育研究会議（議長・藤沢謙一郎信大教育学部長）は十三日、県庁で通算六回目の会議を開いた。一貫教育のタイプでは、既存の中学と高校を結び高校入学時には一定の選抜を行う「連携型」よりも、中学・高校の設置者が同じで入学選抜がない「併設型」か、六年制の「中等教育学校」の方がメリットが大きいとの指摘が目立った。

これまでの論議では、連携型の方が導入しやすいとの意見が多く出ていた。伊那北高の北原明校長は、併設型や中等教育学校の方が教育課程の特色が色濃く打ち出せる点を挙げ「（ゆとりを生み出す）趣旨を生かすなら連携型は不満が残る」と述べた。実践研究協力校の一つである大町高の竹内善一校長も、併設型か中等教育学校を推した。

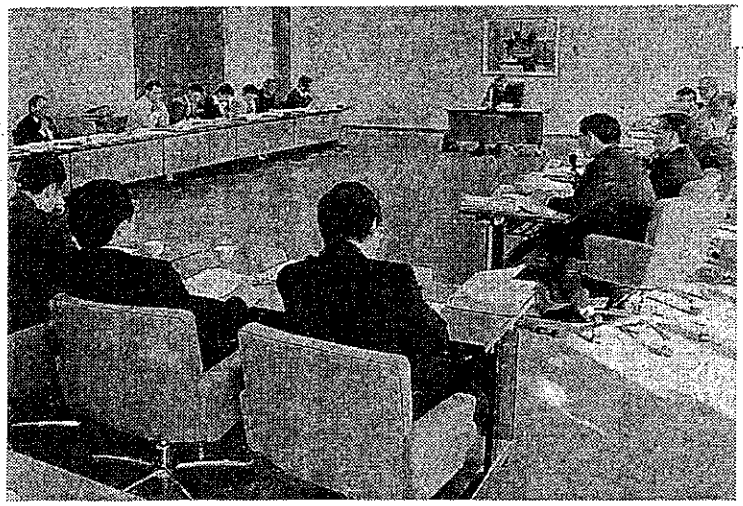
中学入学時の選抜の在り方をめぐっては「選抜があるなら、子どもはそれに合わせようとする。ゆとりを目指すのに型にはまった子をつくることにならないか」（竹内喜宣・県PTA連合会長）との指摘もあった。

1999年(平成11年)11月17日

中高一貫導入に前向き

県研究会議議長がまとめ素案

利点と課題 問題点指摘　委員からは賛否両論



県教委に報告する「素案」について論議した中高一貫教育研究会議

県中高一貫教育研究会議（議長・藤沢謙一郎信大教育学部長）は十六日、県庁で七回目の会合を開き、藤沢議長が「県内でも一貫教育の導入計画を検討する必要がある」と導入に前向きな「まとめ」の素案を示した。委員からは賛否両論が出た。

素案は藤沢議長が中心となり、これまでの議論を集約する形でまとめた。一貫教育の利点として▽高校入試がないため、ゆとりが出る▽幅広い年齢層での学校生活で広い社会性が身に付く▽学校選択の幅が広がる―など七項目を挙げた。

一方で、入試がなく六年間生徒集団が固定されるため、目的意識や意欲をなくすことが懸念され、受験競争が低年齢化する可能性があるなど、課題・問題点として五項目を指摘した。

これに対し、長谷川修三・県教組委員長は「これまでは『導入するとしたら』との仮定で話し合ってきた。導入するかどうか、県民の意見をよく聴くべきだ」と主張。中島武・県高教組委員長も「今年度指定した中高一貫教育の実践研究協力校の成果もまだ反映されていない。もっと研究していくべきだ」と発言した。

一方、竹内喜宣・県PTA連合会長は「六・三・三制より優れている点もあるのは確かだ」とし、導入に賛成した。金子元昭・県高校PTA連合会顧問も「すべての教育問題を解決するわけではないが、基本的に賛成。前向きに考えたい」と述べた。

ほかに、導入についての意見を高校生に聴くべきだ、生徒が興味を持てる体験学習を重視すべきだとの提案もあった。

同会議は来年一月に開く次回会合で「まとめ」づくりを続け、今年度内に県教委に報告する。

第7回　中高一貫教育研究会議（1999.11.16）

2000年（平成１２年）１月１９日（水曜日）　信濃毎日新聞

中高一貫教育
協力校が報告
県の研究会議

県中高一貫教育研究会議（議長・藤沢謙一郎信大教育学部長）は十八日、県庁で開き、一貫教育のあり方を昨年から検討してきた三組六校の実践協力研究校が成果を報告した。「学力向上」を主眼にした大町市仁科台中―大町高の取り組みに議論が集中し、年度内にまとめる報告書づくりは次回以降に持ち越した。

仁科台中と大町高は、一貫教育を想定した教育課程案を示し「中高で重なる内容を精選したり、高校入試がないため、ゆとりができる。今以上に生徒に考えさせる授業ができる」（竹内善一大町高校長）と報告。学力を高めるためには、入試がなく、弾力的な教育課程づくりができる六年制の「中等教育学校」か、中学と高校の設置者が同じ「併設型」が望ましい、とした。

これに対し、県教組の長谷川修三委員長が「（学力向上をうたえば）中学受験時に競争するなといっても競争になる。エリート校化の方向を感じさせ、心配だ」と反論。竹内校長は「面接や調査書など、受験への学習が不要な選抜方法はありうる」とした。

2000年（平成１２年）１月２８日（金曜日）　社説

将来像を明確にして
中高一貫教育

高校入試の必要がなく、ゆとりある教育を展開できる。中学、高校の六年間に継続性を持たせられる―。これだけ聞けば、まず異論は出ないだろう。中高一貫教育のことだ。小学校から高校まで従来の六・三・三制に加え、六・六制が昨年四月から制度化された。

長野県では大学教官や中学校長、高校長、教職員組合代表らによる研究会議で一年余にわたり、意見を交わしている。年度内にまとめる報告書を受け、県教委が来年度から検討を始める。どう方向づけるか、確かな詰めを望む。

中高一貫教育は、九七年の中央教育審議会答申で打ち出された。三タイプのやり方がある。▽六年制の「中等教育学校」を設けるケース▽市立中と市立高など同一の設置者による中高をつなげる「併設型」▽市町村立中と都道府県立高の交流や連携を図る「連携型」―だ。

導入するかどうかは、あくまで自治体が決める。当然ながらプラス、マイナス両面が考えられる。既に事実上の中高一貫教育を先取りした私学もあり、その存在も無視できない。それぞれの自治体でじっくり論議を深める必要がある。

国は当面、高校の通学区域に少なくとも一校、全国で五百校を目指している。しかし、思うように進んでいないのが現状だ。今のところ公立は三タイプが一例ずつしかない。二〇〇〇年度以降の予定を含めても十六校にとどまる。

中高生の年ごろは個性を伸ばし、将来を見定める時期だ。教育に一貫性を持たせる意義は大きい。タイプにより違いはあるものの、中学と高校で重複する教育内容を整理し、浮いた時間を体験学習に充てるといった工夫も可能になる。学校生活のなかで、より広い年齢層が交流できる点も魅力に挙げられる。

もしそうならば六年間見通した柔軟な教育は、中等教育全体の問題としてもっと多角的に対応しなくてはなるまい。一部の生徒、一部の地域にとどめたのでは教育改革の在り方として徹底を欠く。

従って落とせない論点の一つは、特定の学校で取り入れることの是非である。中教審答申は、子供や親の学校選択の幅を広げる観点から「選択的導入」が適当とする。県の研究会議のこれまでの検討も、これに沿った形で進んでいる。

もう一つは、関連して受験競争の低年齢化を生じる可能性だ。一貫教育を始めた場合、魅力を高めたり、成果を分かりやすい形で示すため、受験対策に傾くことは十分に考えられる。

国は学力試験で入学者を選ばない規定を設け、歯止めをかけている。それでも希望者が多ければ、結局は小学校段階で子供を振り分けることになる。

県教委は今年度、三組六校で一貫教育の実践研究をしている。このうちの一組は「学力向上」をテーマに据えた。研究会議では、この実践をめぐり競争激化を危ぐする声も出た。将来を見据えながら長野県の歴史的、地域的な事情も考慮した明快な提案を期待したい。

6年制・無試験「併設型」か 相互交流のみ「連携型」か

公立校 中高一貫教育に両論

県中高一貫教育研究会議の最終報告が二十二日にまとまる。公立校における中高一貫教育はどうあるべきか、三組の実践研究協力校を決めて研究を進めてきた。これまで八回の会合では、六年制の「中等教育学校」や中高を無試験で結ぶ「併設型」を望む意見と、中高の相互交流にとどめる「連携型」がふさわしいとする意見が対立している。（川上 晃一）

県研究会議 22日に最終報告

大町市立仁科台中の音楽室に軽やかなリコーダーの音色が響く。奏者は近くの大町高教諭で個人リサイタルも開くという水内謙一さん(三四)だ。演奏が終わると、ため息とともに拍手が起こった。

水内さんはこの日、「出前授業」で中学一年の音楽を担当した。初めて担当した中学生相手の授業に「高校生の場合以上に、生徒の興味をそそる工夫が必要ですね」と感想を話した。

大町高と仁科台中は昨年四月から中高一貫の実践研究に取り組んできた。教師同士が行き来する出前授業もその一つだ。

「高校教師は自らの指導方法が試される。中学教師にとっては自分の専門能力を試す機会になる」。大町高の竹内善一校長はいう。

両校は出前授業に加えて教科別の研究会などを開き、六年間を見通した教育課程の編成にも取り組んだ。課程作りにあたっては、中高一貫教育を実施している東京都内の私立高校を視察して参考にした。

学校の各学年で何を教えるかは学習指導要領で定められている。だが、文部省の中高一貫教育推進会議は先月、中高一貫校を設置する場合、教育課程の編成を弾力化できるように提言した。指導要領から離れて実験的な教育ができる制度を整えれば、中高の教育内容の相互乗り入れも実現できると推進会議はみている。

竹内校長は「学力の向上をめざすなら、教育課程も見直さなければならない」と話す。そのためにも、学校同士の交流にとどまる連携型より中等教育校や併設型が望ましいという考えだ。

しかし、中等教育校や併設型を実現させるとなると、小学校六年生の段階で入学者を選抜しなければならない。「受験競争がさらに低年齢化したのでは、公立校の中高一貫の趣旨にそぐわない。小学校から中等教育校や併設型にどう接続するかが最大の難問です」と竹内校長は明かす。

実践研究校の間でも、どのような形で実施するかは結論が分かれる。英語科中心に研究した軽井沢高と軽井沢中は大町の両校と同じ見解だが、犀峡高と信州新町中は連携型が望ましいとしている。

中高一貫教育をめぐっては、全国各地で様々な見解や動きが出ている。

北海道教委は中等教育学校と連携型を複数置く方向で検討を進めている。宮城県は県立の中等教育学校を設置することを基本方針に盛り込んだ。

そして高知県は小規模高校の場合は連携型、中規模なら併設型、大規模高校なら中等教育学校が望ましいという報告書を県教育長の諮問機関がまとめている。

中高一貫「早期検討を」

県研究会議が報告書案

「一貫」どう推進　手法は示されず

県中高一貫教育研究会議（議長・藤沢謙一郎信大教育学部長）は二十二日、九回目の会合を県庁で開き、報告書に、公立の中高一貫教育の導入計画をできるだけ早期に検討する必要がある、との提言を盛り込むことを決めた。最終となる次回三月二十七日の会議で、報告書を県教委に提出。県教委は来年度から導入するかどうか検討を始める。

報告書案は「教育制度にも多様で柔軟な対応が必要」とした上で、一貫教育の選択肢ができることは「生徒の主体的な学校選択や学校の特色づくりが期待できるなど、導入に積極的な意見が多かった」と総括。一方、受験競争の低年齢化、小学校六年生の段階での学校選択の難しさ、教員配置、施設充実への配慮などこれまでに出た問題点も併記した。

大町高、軽井沢高、犀峡高など三組六校の実践研究協力校の研究を基に、望ましい設置形態を明記。学力向上を目指す都市部校、特色づくりを目指す専門学科設置校では、弾力的に教育課程が編成できる「中等教育学校」「併設型」が適当とし、地域高校では既存の中高による「連携型」も考えられる、とした。

この日の意見交換では、「受験競争が激しくなる可能性もあり、急ぐべきではない」（中島武・県高教組委員長）との慎重論もあったが、「ゆとりを生かした全人的な教育ができる」「学力以外の問題克服にもつながる」と前向きに評価する声が多かった。

【解説】県中高一貫教育研究会議がまとめた報告書案は、一貫教育導入に前向きな提言になったが、一貫教育をどういう形で進めるかの具体的な手法は明示していない。県教委は、報告書を受け取ってから検討を始める意向で、実現するまでには時間がかかりそうだ。

九八年十一月に始まった研究会議の計九回の会合では、一貫教育による「ゆとり」が子供のためになるとの賛成論と、受験競争の低年齢化などを疑問視する慎重論が最後まであった。ただ、高校入試の負担を軽くするとの見解はおおむね一致し、一貫教育を強硬に否定する意見はなかった。「すべての教育問題を解決するわけではないが、期待は抱かせる」（藤沢議長）との理由で、導入に前向きな結論をまとめた。

こうした背景には、文部省が一貫教育導入に積極的で、高校の通学区に一校程度の一貫校設置を打ち出していることもある。

中高一貫教育は、六年制の「中等教育学校」、学校設置者が同一で高校進学は無試験の「併設型」、既存の中学と高校が連携する「連携型」と三タイプ。研究会議では、三組六校の実践研究協力校の取り組みを参考にしたが、どのタイプが最も望ましいかについては踏み込まなかった。

また、委員からは「他県に比べて多い不登校や高校中退者への対応策として一貫教育を生かせないか」「学力試験はしなくても、面接などで選抜すれば受験競争につながる」といった問題提起もあったが、こうした面での議論は十分に深まらなかった。報告書案は、中高一環教育でポイントとなるべき具体的な点を、県教委の検討にゆだねた格好になった。

最終報告案がほぼまとまる

中高一貫研究会議

中高一貫教育のあり方について検討している県中高一貫教育研究会議の第九回会合が二十二日開かれ、県教委への最終報告案が大筋でまとまった。だが、委員から記述の補足を求める意見があり、来月二十七日に県教育長に最終報告を手渡すことになった。

意見が分かれていた実施形態について最終報告案は、カリキュラムの編成や入学者の決定方法などから、六年制の「中等教育学校」か中高を無試験で結ぶ「併設型」が「適当である」とした。だが、中高の交流にとどめる「連携型」の導入も「検討する必要がある」とし、両論併記の形となった。

マルチ・シンク

中高一貫教育研究会 本音の率直な論議、検討を期待

学校教育行政の大きな焦点の一つとしてクローズアップされている「中高一貫教育」問題が、六月県会一般質問でも取り上げられた。戸田教育長は「長野県としてどのような形が考えられるのか、県民の意見もよく聴いて研究を進めたい」として、市町村教委代表や学識経験者、PTA関係者らによる「中高一貫教育研究会議」を今年度中に設置することを明らかにした。現行学校制度は、いうまでもなく六―三―三制の典型的な単線型である。戦後一貫してこの制度に慣れ親しみ、家庭も地域社会も、子ども達もこれを受け入れ、六―三―三制を前提にした諸々の仕組みが出来上がっている。それが、中高一貫教育制度が一部の中学・高校に導入されて実施されるとなると、同単線型に一つの〝コブ〟がくっついたような形の複線型になると共に、諸々の同仕組みも大きく変容せざるを得まい。それだけに県教委が同研究会を設置して、様々な角度から検討、研究して慎重に取り組もうとの姿勢を見せていることは「当然」であり、極めて率直な本音による論議を期待する。◇この中高一貫教育は、昨年六月の中教審第二次答申で、大学入学年齢の特例（飛び入学）などと共に提案され、文部省は公立校での導入を決め、その推進に力を入れている。ねらいは、人間形成の重要な時期にあたる中学、高校の中等教育期間を画的、継続的に展開できる〝利点〟もあるとされる。学校週五日制の完全実施や教科内容の〝削減〟などで「ゆとりある学校教育」を前面に押し出している文部省は、中高一貫教育はこの〝ゆとり路線〟にもマッチするとして公立学校でも「選択的に取り入れるのが望ましい」との姿勢を強く打ち出している。既に東京都、北海道、宮城県などでは導入の方向で検討に着手し、岩手、埼玉、石川、高知など多くの府県で導入方向の検討を始めたいとしているという。導入しないとしているのは、「高校入試をはさんで三年間づつに区分するのではなく」、高校入試の影響を受けずに、「六年間をゆったりとゆとりのある学校生活を送れるようにする」ことにある。◇同時に六年間を一貫したカリキュラムで組めることなどから教育指導を計「島根一県」との報道もある。◇白紙状態の県教委が同研究会を設置して、その導入の是非から論議、研究を深めるのは結構なことだ。◇というのは、中高一貫教育には極めて深刻な弊害が予想されているからだ。ズバリ受験エリート校化への懸念だ。大都市部での私立受験エリート校を思い浮かべてもらえばわかり易い。全部の中学、高校が一斉に中高一貫教育になる訳ではない。一部の〝選択された〟公立中高に導入され、いってみれば一般の中高とは違う〝区別化された特別の中学、高校〟のイメージが独り歩きすることは疑いない。◇その結果はどうなるか。学力試験に秀でたいわゆる試験優秀児が中高一貫の中学に入学しようとしのぎを削るようになろう。いわゆる〝エリート中学〟に入るために、その中学に多くの入学者を送り出す小学校はエリート小学校視されるのではないか。その小学校に入学させるために、子どもは幼稚園段階から〝猛勉強〟を強いられるのだろうか。何ともやり切れない。いま以上に、中高一貫の中学へまず入るために塾通いが激しくなり、小学校の教室では一般の、〝普通の中学校〟へ行く児童達と、中高一貫の〝エリート中学〟を目指す子ども達が一緒に授業を受ける―おそらくは父母らからの〝不協和音〟も高まる中で教師達はどこに〝水準〟を置いた授業を進めるのだろうか。現場の混乱も予想される。◇義務教育は、とくに公教育の小、中学校では、すべての子ども達が平等に行き届いた教育を受ける権利を有し、公教育はそうした教育を提供する義務があるはずだ。それが今、根底から覆されようとしている。中高一貫教育は「義務教育とは何ぞや」を厳しく問いかけている。推進の立場の文部省は、予算面や種々の行政指導などを通じてその導入、実施を求めてこよう。信州教育はどうするのか―県教委、県民の正念場だ。

マルチ・シンク

中高一貫教育研究会議
あせらず、じっくり論議を

県教育委員会の「中高一貫教育研究会議」（議長・藤沢信大教育学部長）の論議が始まっている。橋本前首相が打ち出した合計六つの改革目標のうちの重要な柱の一つとして、「教育についての改革」が掲げられ、急ピッチで相次ぐ教育諸システム〝改変〟の目玉的な位置づけで登場したのが「公立校への中高一貫教育の選択的導入」だ。戦後日本の教育制度は、いわゆる六・三・三制の単線型で進められてきた。ところが、人間形成にとって大切な時期にあたるとされる中学、高校時代が三、三年に区切られ、その間に受験戦争とも呼ばれる高校入試が存在し一部では〝灰色〟の少年・少女時代などとも呼称されて種々の問題が表面化してきた。このため高校入試の影響を受けないで「ゆとりと心平穏な安定した中等教育生活を」とし、一方で六年間の一貫した教育体制下で計画的・継続的な学校教育が展開できるなどの〝利点〟が強調されて、中高一貫教育の選択的導入が具体化。文部省は今年四月から実施に踏み切っていることは、ご承知の通りだ。◇こうした流れを受けて、県教委は大町市、信州新町、軽井沢町の各三中学・三高校を実験校に指定し検討をスタートさせている。同研究会議もその一環として新設された。県庁で六日開いた同研究会議では「中高一貫教育を行う場合、どの様な形態が望ましいか」をめぐって論議を深めた。というのも、一口に中高一貫教育といっても、そのスタイルによって①同一貫教育を希望する中学生が一定の〝簡易〟な選抜方法による選抜を経て高校進学する「連携型」②高校入試はなく高校に進む「併設型」③六年制の学校を新設置する「新設型」――の三つに分かれる。小学校を卒業してすぐ進むことになる②と③は、その学校の設置者が県なら県、市町村なら市町村と「同一者」でなければならず、文字通り「中学、高校が一体となった中高一貫教育学校」となる。◇ところが①の連携型は、その中学と高校の設置者が異なっていてもOK。現行県内の設置者、高校は県（一部に市）、中学校は市町村のままで、いってみれば今の中学、高校が手を握って協力し合えば、六年間のカリキュラムなどを作成してそのまま中高一貫教育を実施できることになる。こうした現実的なメリットもあって、六日の同研究会議では「連携型」が「適切ではないか」との意見が目立ったという。一方で、設置者を変える手間や経費負担問題など〝やっかいな〟問題点も抱えるものの、「学力向上という視点からは、併設型で特色ある中等教育学校をつくり上げた方がメリットがあるのではないか」との意見も出されたようだ。◇この学力向上という視点からの指摘は、うなづける。いま長野県は、児童・生徒の学力アップ問題が緊急の課題になっていることは、毎県会毎に登場する同問題論議を見るまでもない。一定のカリキュラムに従って六年間一貫してガッチリと学習を積み上げることは、今の高校入試をはさむ〝寸断学習〟より効果はあがるのではないか――との期待を抱かせる。が、その一方で、依然としていわゆる進学高校から、〝有名大学〟に入り、さすれば就職にも有利で何かと安泰といった一種の社会的風潮が〝後遺症〟として残る現状下では、この学力向上に〝有利〟とする見方の中高一貫校は、小学校からの新たな激しい、「中高一貫校への入学争い」を引き起こすのではないか。教育界はじめ、各方面から「中高一貫教育の導入は、新たな受験エリート校をつくり出すのではないか」との指摘が、既に相次いでいる。◇宮崎県教育委員長は、一昨年の六月県会で一般質問に答えて、中高一貫教育について次のような考え方を明らかにしている。①個性の発達が未成熟な小学校六年生の時点での進路選択の難しさ②義務教育段階から二種類の学校をつくる復線化については、現在世界の多くの国々が逆に復線化構造を単線化して教育内容の質的な充実を図ろうとしている動きに逆行するとの指摘もある③学校という場所は、特に公教育においてはすべての子ども達に行き届いた教育を提供することを中心的な使命として組織された場所であることを基軸に、進めるべきものと考えている。◇この通りであり、同感だ。だが、実施に踏み切った文部省は、公立校への中高一貫教育の選択的導入を折にふれて強く求めてくることが予想される。ここは一つ、あせらずじっくりと、長野県らしい独自の方法確保のために頑張りたい。

ゆとりか受験競争激化か　検討中多く導入はわずか

ニュースの視点

公立の中高一貫教育

学校教育法改正で本年度から、公立の中高一貫教育が実施できるようになった。高校入試をなくし、ゆとりある学校生活と学校選択幅の拡大を目指す。長野県でも、導入すべきかどうかを含めた県中高一貫教育研究会議の論議が最終段階となっている。

中高一貫教育は、①六年制の中等教育学校②学校設置者が同じ中学と高校をつなぐ併設型③設置者が違う中学と高校が交流、連携する連携型―の三タイプがある。高校入試がない中等教育学校と併設型には、選択教科を多く設定できるなどの教育課程編成上の特例がある。連携型は、編成上の特例はないが、高校への入学選抜は調査書や学力検査ではない簡易な方法で行える。

どんなタイプでどんな教育内容にするか自由だが、「いわゆるエリート校化しない」（文部省）が条件の一つ。九七年六月の中央教育審議会の答申では、教育上の特徴として、体験学習、国際教育、情報化、伝統文化の継承など七例を挙げている。

本年度、すでに一貫教育を導入しているのは、全国で宮崎県の五ケ瀬中等教育学校、併設型の岡山後楽館中学校・高校、連携型の三重県の飯南中、飯高西中、飯高東中、飯南高校。全寮制で自然体験重視（宮崎）、地元を知る郷土学習（三重）などの特徴がある。

岡山後楽館は、ゆとりある学校生活を不登校経験者ら既存の学校のリズムに慣れない子どもたちに提供。中学の募集定員（八十人）の一〇％まで小学校での不登校経験者と定めている。高校も午前部、午後部、夜間部の多部制で、幅広い選択教科を用意する総合学科とした。

長野県では、大学教授やPTA代表、教職員組合幹部らの県中高一貫教育研究会議が九八年十一月に発足。これまで八回の会議では、幅広い年齢層の学校生活で社会性や協調性が育ち、学校の特色づくりにつながる―などが利点として上がった。一方、試験でなくとも面接などで一部の入学生を選ぶことは、受験競争の低年齢化を招く、と問題点を指摘する意見も出ている。

二十二日の次回会議で議論の結果を取りまとめ、三月末までに県教委に報告。来年度から県教委内で検討する段階に入る。

文部省は「だれもが選べるよう当面の目標は、高校通学区に最低一校ずつの全国五百校」（高校課）としている。だが、長野県も含め検討中のところが多く、二〇〇〇年度に公立校で導入するのは、秋田市の市立中学・高校（併設型）と、連携型では鹿児島県与論町の中学・高校、大分県の四中学・一高校など。二〇〇一年度以降の導入を計画しているのもまだ十例余にとどまっている。

公立中高一貫校のタイプ

	中等教育学校	併設型	連携型
概要	6年制の学校	中学、高校は別々の学校。設置者は同じ	中学、高校は別々の学校。設置者は、中学校は市町村など、高校は都道府県
教育課程	6年間一貫。選択科目、その他科目の拡大など弾力的な編成ができる	設置者が中学、高校を一貫して編成。中等教育学校に準じて弾力的に編成できる	中学と高校が協議して、決める。編成の特例はなし
入学者決定方法	学力検査は行わない	中学入学の学力検査はなし。中学から高校へは無試験	連携校への進学は、調査書や学力検査がない簡易な方法で選抜
〈実際の例〉	五ケ瀬中等教育学校（宮崎県）	岡山後楽館中・高（岡山県）	飯南中、飯高西中、飯高東中―飯南高（三重県）
設置者	宮崎県	岡山市	中学は、飯南町と飯高町、高校は三重県
学校規模	1学年1学級（40人）、計6学級	中学校は1学年2学級（80人）。高校は1学年4学級	中学校は、3校合わせて約450人。高校は1学年3学級（120人）
高校（中等教育学校の後期）の課程と学科	全日制普通科	定時制総合学科	全日制総合学科
教育の特徴	体験学習の重視、異なる学年との集団学習、全寮制	不登校経験者の受け入れ枠を設定、中学での習熟度別学習、定時制の多部制	地元を見直す「郷土学習」の重視、高校教師を中学に派遣しチームティーチング